
歩くロストロギア製造機

青花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歩くロストロギア製造機

【Nコード】

N60240

【作者名】

青花

【あらすじ】

時空管理局技術局副局長　それが彼の役職。そんな彼の実態を知る者はこう呼ぶ。“歩くロストロギア製造機”、と。「趣味に生きることの何が悪いと言っんだ！？　てか早く何か開発させろよ！」

0 プロローグ（前書き）

処女作の駄文となっ
ていますので、過度の期待は厳禁です。
後、ところどころツッコみどころが存在しますが、それらを全て作者は説明出来ません。正直ご都合主義で流すほかありませんので、そういうところには目を瞑っていただければ幸いです。

0・プロローグ

「今日これより、君には機動六課へ異動してもらう」

「はあ？」

眼の前に座る初老のオッサンは、この全次元を統括する時空管理局の局長、つまりトップという訳だ。

まあそんな人間と面識ある俺も少し可笑しな話だと思うが、今は横に置いていて欲しい。

今話すべき議題は、オッサンが零した”異動”という単語についてののみ。

これでも俺は本局技術局副局長という、そう簡単に異動出来るような役職ではないのだ。

それに、今現在も新たな発明に取り組んでおり、二三日は缶詰になることを懸念していたというのにこのオッサンは……

「てか機動六課ってあの新設の？ 管理局のネットワークに侵入して中身を閲覧してみたけど、中々どうしてツッコミどころ満載の部隊を新設したもんだよな」

「……管理局のトップの眼の前で堂々と違法行為をバラすな、この馬鹿」

「ま、そこは気にしちゃ駄目でしょ。んで？ 何で俺がそこに行かなきゃならんのだ？ あの部隊って殆どが身内で構成されてるじゃん。俺が行ってもどうせハブられたり陰湿な虐めとかありそうで嫌なんだけど……」

「んなわけあるか。……一応お前をストッパー代わりにしようという結論が我々の間で採択されたのだよ。お前がいればどんな問題も万事解決するし」

「えー、だってあそこの連中皆潔癖症持ちじゃん。絶対に無駄な争い起きそうだし。それにそこ行ったら俺の趣味が……」

「既にそこにはお前専用のラボが態々作られている。それでも「わかりました！ このヘルメス・アルスマグナ、今日以て機動六課へ異動します！」そうか、なら早速現地へ向かってくれるか？ 今日が部隊発足日だからな」

「へ？」

「後30分後に着任予定だから早く行くように」

は、嵌められたあああああッ！？

side はやて

「遅いなあ〜」

今日やって来るであろう人物に向けて、うちは溜息を零す。

現在、この部屋にいるのは小学校からの親友であるなのはちゃんとフェイトちゃん。それにうちの副官であるリインの三人や。

三人とも旧知の仲なので、こう居るのが辛いという雰囲気はないんやけど、やっぱり皆もこれから来る人について興味津津。さつきから挙動不審な犯罪者みたいになってるしな。

うーん、もしかして連絡がいつてないとか？

いや、それはありえんやろ。なんせその人を指名したのは伝説の三提督。彼の人達が直々に、それも名指しで指名したらしいからそんな間違いは起こる筈がない。

「事故でも起きたんやろか……」

そうなるかと心配になってくるが、どうやらそれは取り越し苦労になりそうや。

部屋のブザーが鳴り響き、この部屋に誰かがやって来た旨が告げられる。

それをうちは姿勢を正し、どうぞと一声掛けた。

s i d e o u t

ああ、なんて人使いが荒い連中なんだろうか。

俺がここにいるのは頼まれているからであって、自分の意思で留まっているのではないと知ってるだろうに。

それでも従ってしまう俺って……

確かにあいづらにはたくさんの恩があるにはあるけど、それも既に返したような気がするんだけどなあ。

「結局俺が甘いだけなんだろうけどな」

少し歳の離れた親友にも「君は最終的にはその甘さで誰かを助けるだろうね。でも、その甘さが君の人徳じゃないかな？」って言われたし。

それでも一応冷酷な一面とか持つてるんだぜ？ 本当だよ？

愚痴を零しつつ、俺の目的地である機動六課に急ぐ。

本局からならその場所まで一時間以上掛かるのだが、生憎と俺は天才で名が通っている。

「部屋とか必要なモノはあっちに送られてるらしいし、この身一つで大丈夫だろ。いざとなったら取りに帰ってきたらいいし」

俺は自分の発明品である大きいチャックを取りだす。
それは自分の意思があるかのように宙に固定された。本来ならば在り得ない現象がそこには存在する。

俺はそのままチャックを開く。すると、普通ならチャックが開くだけなのだが、ここでは誰もが度肝を抜く展開が見られた。

チャックが開くと、それと同時に次元の穴も開く。
そのまま手を入れ、俺は目当てのモノを取りだした。

「テテテーン！ どこでも アゝ！」

これも俺の発明品の一つ。

これは自分が行きたい場所の座標を入力することで、魔力がない人間でも次元跳躍が出来るという優れ物。

勿論、それは同じ次元でなくとも、他次元にも赴ける仕様となっています。

俺はそれに座標を設定し、そのまま扉を開く。

某管理外世界の国民的アニメを見て開発したこれだが、驚くほど利便性が高く、俺はいつも愛用している。

扉を潜り、機動六課の眼の前までやって来た俺。

そのまま受付に話を通し、今は六課の中を彷徨い歩いている。

一応説明された通りに歩いてはいるが、一向に辿り着く気配がないんだが？

もしかして俺を騙して笑い物にしているのかっ！？ とか思った

けど、どうやら違ったみたい。
眼の前に普通に存在してた。

「んじゃポチッつと」

ブザーがヴーと鳴り響き、中からどつぞとの声が掛かる。

「失礼しますつと」

扉を潜り抜けると、そこに居たのは局でも有名な三人。後、なんか妖精みたいな奴。

「今日からこの機動六課に配属されることになったヘルメス・アルスマグナです。前部署は本局技術局で、そこでは副局長をやってましたあゝ」

一気に説明を畳みかける。

俺としては挨拶は面倒なのだ。んなもん、全て本局のデータベースを盗み見たら載っていることだし。

だから大抵俺の挨拶はこんな感じになる。

「挨拶御苦労さん　　って!?　技術局副局長!?　そんなナリで!?」

「デメエ、ナリは関係なくなっ!?　挨拶一番そんな酷いこと言われたのは二回目だよ!?」

「二回目なんかいつ!」

ふむ、どうやら相性はいいようだ。

「は、はやてちゃん……」

「そんな呆れた眼でうちを見んといて」

「んじゃ挨拶もしたしこれくらいでいいか？ 俺はさっさと自分の部屋に行きたいんだよね」

おっさん曰く、俺専用のラボを作ってくれたみたいだし。

ああ、どんなのだろうな。最新式の開発器具一式は置いといて欲しいけど、まあそこまでは高望しないさ。

開発出来る空間と邪魔する人間さえいなけりや、そこはまさに楽園！

「って待ちいや！ うちの挨拶が「八神はやて二等陸佐、高町なのは一等空尉、フェイト・Ｔ・ハラOWN執務官。二つ名はそれぞれ「夜天の主」」「エースオブエース」」「雷光」」「えっ？」

いきなり俺が話したことに驚いてるが、特に気にはしない。

「三人とも第97管理外世界」地球」出身であり、」PT事件」

闇の書事件」と二つの難題を解決したと言われている若きエース達」

「よお知つとるな……」

「これくらいなら局のデータベースにアクセスしたら出てくる情報だろ？ ま、そういうことで三人 いや、この機動六課にいる人間の情報なんかは頭の中に叩きこんでるから自己紹介とかは必要ないぞ？」

「それでも挨拶はキチンとしないといけないんじゃないかな？」

振り向けば、そこには笑顔でこちらを見る高町。

それは笑顔なのだがどこか圧力が加わって来る。これが無言の圧力というものか……ッ！？

「あゝ、わかったわかった。これからよろしく願います、八神

二佐、高町一尉、ハラオウン執務官」

形式的なのは嫌いだが、ここでこうしておかないと間違いなく制裁が下る。

あれは間違いなくそうする眼だ。

「うちのことは普通に名前でもええよ？ な？」

「うん」

「私もそっちの方が嬉しいかな」

「あ、そう？ ならそうするわ」

「……こう軽く言われると前言撤回したくなるな」

許可も貰ったし、今日からは地で過ごせるな。

本局とか知り合いの部隊なら問題ないかもしれないけど、流石に初めて行く部隊ならTPOってのも弁えないと問題だらけだろうし。一応俺もそこらへんは考えてたりするのさ。

「ま、俺のことはヘルメスって呼び捨てで構わないぞ」

「それじゃヘルメス君って呼ばせて貰うね」

「あゝ、君付けは止めてくれ。一応俺はあんたらより年上だからな」

「「えっ？」「」」

やっぱりそういう反応されますよね。わかってましたよ、俺がシヨタフェイスだということくらいわさ。

「い、いや、シヨタまではいかんけど、うちらと同年代と思うとつたわ」

「それじゃ何歳なの？」

「今年で25になる……」答

「「25!？」」「」」

そんなに驚かなくてもいいんじゃないだろうかねえ。
あ、涙が……

0 プロローグ（後書き）

誤字脱字、感想などお待ちしております。

1 命名、ヘルメス城（前書き）

中々話が進まない……

ま、これもすぐに解消される……はず？

1・命名、ヘルメス城

「ほら、そろそろ泣きやんでや。うちらが悪かったから、な？」

「そ、そうだよつ。私達が悪かったから、ね？」

「うん、ヘルメスは何も悪くないから……」

美女三人に現在進行形で慰められている俺。

傍から見れば羨ましい光景だろうが、俺をこうした原因は連中にある為、俺としては全くと言っていいほど嬉しくはない。

まあこうやって泣いているのも、こういう反応を見るのが好きだからなんだが。

それを考えるとどっちもどちな気がしてくるのは何故だろう？

美女に連れられ赴く場所は、俺の居城となる部屋。

彼女達が言うには、今日の今までその部屋は何に使用されるか知らされてなかったとか。よくそんなので開発する費用が下りたな。普通なら跳ねられて終了じゃねえの？ ああ、そっぴやこの部隊の施設の非公式の後見人は婆さん達か。そりゃ通るわな。

「てか、何でさっきから入口で止まってんの？」

ジツと扉を見詰めるはやてに、流石に俺は心配になって問いかけた。

まさか扉の開け方を忘れたとか？ その歳で痴呆症はやばいんじゃない？

「誰が若年性アルツハイマーやねん！ って、違う違う、なんやこの扉にロックが掛かってんねん」
「ロック？」

そう言って扉に近づくフェイト。
ふむ……、こう並んで見ると、本当に三人は同年代か疑わしくな
ってくるな。特にフェイトとはやてが並んだ時が凄い。まだなのは
とかなら許容範囲なんだが、フェイトだと……可哀想に。
そんな思考すら読まれたのか、はやてはこちらを向いて苦い顔で
見てくる。

「さっきからなんや酷いこと言われまくってる気がするわ……」
「どうかしたの、はやてちゃん？」
「い、いや、何もないよ」

「というか、何故にロック？」

「ちよいフェイト、どいてくれ」
「あ、うん」

その扉に掛かっている電子キーを見る。
そこには確かにロックが掛かっており、扉は全く開かない。

「声紋認証、指紋認証でもない。かといって網膜認証でもないし……」
「……」

俺はここに来る前に扉を開く鍵なども渡されてはいない。
ということはこの扉はどうかすれば開くということ。てか、何
で態々こんな面倒な仕掛けを作ったの？ 俺に対する嫌がらせで
すか？ ねえ、ねえってば！

「アナログでもないし……ああ！ もう面倒だな、オイ！」

ならば最終手段を発動しようか。

俺は懷に手を伸ばし、一つの機械を取りだす。

「ジーニアス、この扉をハッキングして無理矢理開ける」

『……いいのですか?』

「構わん。俺が許可する」

『了解しました。数秒お待ちください』

そう言つて会話する俺達を見て、はやて達は驚きの声を上げる。

「あんた、デバイス持つてたんか……」

「そりゃ、これでもS級デバイスマイスターの資格を持つてるからな」

「S級!? S級つて局でも十数人しか持つていないって言われてる、あの?」

「ん? まあ、そう言われると、そうですとしか答えようがないなあ」

『マスター、ハッキング完了しました。扉、開きます』

「ん、サンキュー」

ようやく扉は開く。後でこんな無駄な機能は取り外しておいて、新しい鍵でも付けとくか。

指紋認証が一番手つとり早そうだし、それでいいや。

「それじゃ早速中に入りますかね」

未だ茫然としている三人を放っておいて、俺は一人で自分の部屋の中へと入っていく。

中へと入ると、まず眼に入ったのが3LDKすら生温いほどの広い、正直一人でどう使えばいいのかわからない部屋。

そこには風呂もトイレも完備と、俺が借りているマンションよりも豪華という内容で流石の俺も吃驚だ。

間取りを確認していくと、一つの重厚な扉を見つけた。それを開き、中を覗くとそこは地下へと続く一本の道。興味津津でその中を潜り抜けていくと、そこには楽園が広がっていた。

最新鋭の開発機材、それも技術局でも俺専用にと取り寄せられた一式がそこには存在し、また様々な実験器具などが所狭しと並んでいる。

「シャッーーーっ！　ここならいくらでも趣味に専念出来るじゃねえか！　流石はおっさん！」

俺が一人ではしゃいでいると、扉から三人も遅れて入って来る。

「うわぁ……………」

「凄い……………」

「というかうちには何に使う機械が全くわからんし……………」

先ほどよりも茫然とした表情だが、今の俺には関係ない。

もう気分上々。今なら何だって出来る気がする。

「てか、一隊員でこの優遇は酷過ぎやん。うちの部屋より豪華やし」「それを言ったら、私の部屋なんてフェイトちゃんと一緒だけどここより狭いよ？」

あはは、今日から何を作ろうかな。

前々から考えてたアレとかコレとか……。うーん、夢が広がりまくるな！

「というかそろそろ戻って来んかい！」
「うげっ!？」

頭に衝撃。

それにより俺は現実世界に呼び戻された。

「何と言うスナップの使い方!? お前なら世界を取れる!」
「今はそんなんはどうだっていいっちゃうに。んで? 何であんたはこんなに優遇されてるんや?」

疑問顔の三人。

「さあ? ただ、俺は婆さん達に局に残ってくれて頼みこまれて残ってあげてるからじゃね?」

「婆さん達?」

「ああ、あんたらに通じないか。三提督って言ったらわかるか?」

「三提督って……、まさかミゼット・クローベル本局統幕議長やラルゴ・キール武装隊栄誉元帥、レオーネ・フィルス法務顧問相談役のこと?」

「ついでに言ったら本局局長とか武装隊の総隊長、教導隊の総隊長、海の提督統括とかレジアス中將とか色々だな」

「……」

もう信じられないとばかりの顔をこちらに向けてくる三人。いくらなんでも失礼しぎやしないかね?

それでも一応「天才（または天災）」とまで呼ばれてるんだぞ?

「まあこの部隊に来たのもどうせ陸、海、空、本局の橋渡しが本来の目的だろうな。俺がいればほとんどのことが罷り通るだろうから」

いくら大分と溝が埋まって来たと言っても、それはそれぞれのト
ップだけであって、その下につく者達は未だ小競り合いなどが行わ
れている。

大体、この部隊を設立する時も結構な論争があったらしい。ま、
今さっき上げた人物達の声で収まったらしいけど。

だからこうして俺がここに派遣されたんだろう。無駄な争いを起
こして、折角埋まって来た溝がまた深まることだけを避ける為に。

でもそれを考えると、何故態々こんな無駄をしてこんな部隊を設
立したのか。

名目上ではレリック問題専門部隊とか言っていたけど、どうやら
裏がありそうだな。一応調べておくか？

「…………でもそれだと何で俺に話が回って来ない？」

「どうかしたの、ヘルメスさん？」

「ん、いや何でもない」

なのはに声を掛けられるが、今はそれに答えるだけの余裕はある
が、面倒なので答えない。

「ま、今んなことを考えても意味はない、か」

そう結論付け、俺達四人は上の部屋へと戻った。

上に戻ると、呼びだしが入る。

どうやらそろそろ部隊発足の挨拶らしい。

正直、そんなものには出たくなかったので俺は部屋に残るという
旨を告げたが問答無用で連れていかれた。

何か扱い酷くね？ これでも俺は君らより権力持つてるんだよ？
それなのにこの扱いって……

まあいつもことだからいいけどさー、と愚痴を吐きつつ連れて行かれる。

その間にずっとなのはとフェイトが慰めてくれていたから、このささくれ立った心は多少は癒された。

その場所に辿り着くと、既に底には人で埋め尽くされていた。うう、酔いそう。

そんな感想すら言えないまま、俺ははやてに首根っこを掴まれる。完全に年上とも思われてない気がするんだが、そのところはどうかろう、となのは達に聞いてみると苦笑で返された。おい、苦笑じやなくて言葉で返してくれ。

溜息と愚痴のオンパレードになのはもフェイトも若干引き気味だったけど、はやては完全に気にしていなかった。それだけ神経が図太いんだ、この狸は……

部隊発足の挨拶は続いてく。が、正直はやて以外は誰も喋っていない。ということは俺がここにいる意味は完全に意味がないと思うんだが。

まだ俺が話すとかなら納得出来たけど、それすらないってどうよ？

そんなことを思っていたのがいけなかった。俗に言うフラグを立てたということだ。

「では、最後にこの機動六課に配属となったヘルメス・アルスマグナさんに挨拶を頂きましょう」

「は？」

「え？」

「はやて？」

マイクを持たされ、人がズラーっと並んでいる所に立たされた俺。
……どうしろと？

1・命名、ヘルメス城（後書き）

そついや、ヒロインはどうしようか。

正直誰でもいいんだけど、特に決めてないんですよね。

2・名前の所以（前書き）

ちよつとずつ物語は進行していきます。鈍足だけど

2・名前の所以

さて、どうしようか……

眼の前には俺の挨拶に期待する人間が数名で、ほとんどが「コイツ誰だ？」的な眼で俺を見詰めている。

それが最も顕著なのが”夜天の書”の守護騎士の一人”鉄槌の騎士”と”烈火の将”だ。もう睨みつけるといふ表現が適当なくらい見詰めてくる。

唯一救いなのが、なのはとフェイトがオロオロしてくれていると
いうことだけ。あれは心が安らぐ。

さて、どうしよう。

いつまでもこうしているわけにはいかない。これでも並列思考と
高速思考くらいは扱える。その為、こうして長々と思考している風
に見えるが、実際には未だ一秒すら立っていない。

しかし、こうして改めてみるとやはり若いのが多いな。俺以上に
歳食ってる奴いないんじゃない？　もしかしてここじゃ俺が最年長？
んな馬鹿な。

そんな若手ばっかで部隊運営が出来るのか？　いくらトップがエ
リートと言っても、経験が少ない甘ちゃんだし、将来有望と言つて
も、今すぐ現場で使えるほど熟練している人間などこの中には本の
一握りほどしかない。

……貧乏クジを引かされたか？

「あー、今日からこの機動六課に配属となったヘルメス・アルスマ
グナだ」

はあ、もう言っても遅いのかねえ。

絶対面倒事に巻き込まれること確定だろ？ 婆さん達も何考えてんだか……

「ここでの仕事は基本的にデバイス関連のあれこれを手伝えと婆さん達に言われてるから、暇があれば見てやる。以上」

仕方ない。腹を括るしかない、か。

いざとなったら姿を眩ませたらいいだろ。それまでは働いてやるよ。

こう見えても俺も”甘ちゃん”らしいからな。

暗黒の歴史は終わった。まあただ部隊発足挨拶が終了しただけだけだね。

俺はそれを見届け、意気揚々に自分の居城に戻ろうとするが、また悪魔の手が俺を捕まえる。

「待ちい。ほんまならさっきの挨拶で紹介しようと思っと思ったのに、あんたがあんなに早く切り上げるから主要メンバーにちゃんと紹介せなあかんねんから」

チツ、なら何だ？ 俺が悪いとでも言うのか？

「ほ、ほら、はやてもそんなこと言わないの。でもねヘルメス。挨拶は大事だと思うんだ。だから、ね？」

「はあ、わ「あなたがヘルメスさんですねっ！？」「ごふっ！？」」

フェイトの言葉に文句を言いつつも了承しようとした瞬間、俺が

何かにぶつかられた。

本気で意識が飛びかけたが、それは気合で復帰。

誰だ、俺にぶつかってきた馬鹿は。そんな思いを抱きつつ、自分に未だ抱きつく人物に眼をやった。

「シャ、シャリー……？」

「あなたが本局で最も有名で有能な”歩くロストロギア製作機”ですかつ！？」

「何だ？」 歩くロストロギア製作機” って、滅茶苦茶物騒な響きをしてるけど」

この騒ぎにはやての言う主要メンバーが集まって来る。
ちようどいいと思っただけど、やっぱり何か納得いかない。

「知らないんですか！？ 本局じゃなのはさん達より有名ですよ？」

「うちは聞いたことないけど」

「私も」

「いいですか？」

指をピシッと立てて説明するのはいいが、いい加減この腕を放してくれはしないか。結構苦しいんだけど。

パワードスーツ

「今現在、陸で採用され始めた強化外骨格を始め、XV級大型次元航行船”カラストロフ”、超大型情報端末機”ミームル”、戦術級兵器”ジークフリード”など様々な発明を重ね、この世界に役立てている天才ですよ！？ それでついた渾名が」

「”歩くロストロギア製作機”というわけだ」

よく俺のことについて調べてるな。

ま、俺も上や技術職の人間からは要チェック対象らしいし。

「強化外骨格^{パワードスーツ}って、あのリンカーコアがない人や魔力資質が少なくてもAランクからAAランクと同等の戦力を実証出来た、あれ？」
「XV級大型次元航行船”カタストロフ”言うたら、この艦一隻で次元航空艦隊とやり合えるっていう、あの化物艦のことか？ クロノ君がぼやいてたけど」

「超大型情報端末機”ミームル”って本局に設置されてる管理局の全情報を収集、解析、整理してるって私はユーノ君から聞いたことがあるよ。あれのおかげで無限書庫の整理が段違いで楽になったって涙流してなあ」

「戦術級兵器”ジークフリード”って言ったら、アルカンシエルの小型版みたいな奴だろ？ それをコイツが作ったのか？」

「ええ！ 私達技術屋にとったら神様みたいな人なんですよ！？」

「あ、ああそうか、スマン」

あまりの迫力に鉄槌の騎士が引いてるな。

「何て言うか、別に俺が自己紹介しなくても済んだな」

「……そうやな。でも一応ちゃんと自己紹介はしてくれるか？ シヤリーは知ってるかもしれんけど、うちの子たちはあんまり知らんようやから」

「あいよ。んじゃ名前はさっき言ったから問題ないな？ 前部署は本局技術局で副局長をしていた」

「私の名前は“ああ、”烈火の将”シグナム・八神二尉に”鉄槌の騎士”ヴィータ・八神三尉、”湖の騎士”シャマル・八神医務官、それとシャリオ・フィニーノ一士か。そう言えば”盾の守護獣”と呼ばれる騎士はいないのか？……よく知っているな？」

「ああ、シグナム。ヘルメスさんはこれが普通らしいで？ 現にうちら三人の時もそうやったし」

「そうなのか？」

「まあな。さつきも言った通り”ミームル”を作ったのは俺。勿論、それにアクセス出来る優先度は俺が一番上に設定してるから、いつでも情報なんかは見放題っていうわけだ」

「……それって犯罪じゃねえのか？」

「それは問題ない。三提督らにはちゃんと黙認されてるからな。と
いうことであんたら全員の情報は持つてるから、特にそちらから言
わなくても問題ない」

その説明を受けても烈火の将は少し不満顔か。

生真面目な奴は本当に面倒だねえ。もうちょい気楽に生きていこ
うぜ？

「それでも、だ。私の名前はシグナム。これから短い間だか頼むぞ」
「んじゃあたしも。あたしはヴィータ。ちっこいとか言ったらハッ
倒すからな？」

「私はシャリオ・フィニーノです。気軽にシャリーって呼んでく
ださい」

「ま、よろしく。俺は気軽にヘルメスって呼んでくれて構わねえか
ら」

一通りの挨拶を終えることが出来た。

そう言えば、さつきから気になってるんだが、はやての横に浮い
てる妖精はなんだ？

「やつとリインの出番ですか！？」

「妖精？」

「リインは妖精なんかじゃありません！ リインフォースツヴァイ
というちゃんとした名前があるのです！」

「あゝ、この子は私のユニゾンデバイスや」

「へえ、これが古代ベルカの叡智を現代で復活された唯一の成功例

か……」

マジマジと見詰める。

見た目共に古代ベルカのユニゾンデバイスと何ら変わらない。

アギトと会わせたら仲良くなるんじゃない？ 機会があったら会わせてみるか。後、ルーもそろそろ同年代の友達が必要だし、出来たら連れてくるか。

「そつか。ま、これからよろしくな、リイン」

「はいです！」

挨拶もやつと終わり、俺は一度自分の部屋へと戻って来た。

次は数時間後の前線メンバーの教導を見てくれないかとなのはに頼まれた。

何故俺が？ と聞いてみたら、教導隊の総隊長と知り合いならそれなりに出来る筈だからとのこと。

何て言うか、ねえ？ 俺、それでも魔力資質は底辺にいる役立たずなんだけどなあ。

「君が役立たずなら、この世界に存在するほとんどの人間が役立たず以下になるね？」

現在、この部屋は防音、傍受、ありとあらゆる対策がなされており、一種の聖域とまで昇華されている。

そこに割り込める存在は俺が指定した人間のみに。

「お。どうかしたか、スカさん？」

「いや、君が新たに発足された部隊に異動したと三提督達から耳に

してね。どんなものと連絡を入れてみただけだよ」

眼の前のディスプレイに映る人物は、この時空管理局から広域指名手配を受けている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。

そこに映る人物はどう見ても次元犯罪者には見えない。それもその筈

「そっちはどうだ？ 何か問題はあったか？」

「そうだねえ。ドゥーエが上手くやってくれたおかげで最高評議会に近づけたようだよ。後は娘達やルーテシアが君に逢いたいって言うくらいかな。あ、何気にクイント君達も同様だよ」

「ナンバースやルーは良いとして、クイントさん達も同様ってのは問題だろ」

「君がいる部隊には彼女の娘がいるからだろう？ 話が聞きたいんじゃないかな」

「あー、そっぴや居たな」

クイントさんに良く似た、青い髪を持つ少女が。

「そっちこそどうだい？ 殆どが初めて会う人間だろう？」

「特に問題ないな。自分の居城もこうして与えられたからな」

「ふふっ、それならいいんだ。でもたまにはこちらにも顔を出してくれ。そうでもしないとルーテシアを初めとする娘たちが暴動を起こして僕に文句を言ってくるんだ」

「……娘の文句くらい対処しろよ」

「……出来ると思うかい？」

「……無理だな。お前ってあの中じゃヒエラルキーが底辺にいるもん」

「……だろう？ だからこうして頼みこんでいるんだ」

何て言うか、自分の娘達に虐げられている姿を想像すると泣けてくる。

一応あれでも親愛の情はあるから問題ないだろうけどな。誰も本気でやってるわけないし。

「ま、休みが出来たらそつちに顔くらいは出しに行くさ」

「そう言ってくれるだけで助かる」

そうして俺がディスプレイを閉じようとするが、それはスカリエッティの言葉で遮られた。

「どうやら”コピー”が動いているようだよ」

「何？」

「それと同じくして、最高評議会が持つ施設の一部が最近まで稼働していた痕跡を見つけた」

「……」

「そこで行われていた実験は”人造魔導師計画”のようだ」

「チツ、屑はどこにでもいるってことか」

「そうだね。一応こちらでも調べてみるがそつちでも一応頭の片隅に置いてほしい」

「了解だ」

それにより通信は終了する。

それを最後まで見届け宙を見る。

人造魔導師計画、か。人間によって人間を創りだす禁忌の術。

このクラナガン、いや全次元でも倫理的な問題の為に研究、実験などは法に触れる筈のそれをどこの誰かが試している。

しかも”コピー”まで動いているとなると、十中八九ソイツが犯人で間違いない。

ピースとピースが漸く嵌り始める。

「俺が思っていた以上に面倒事になりそうだな……」

2・名前の所以（後書き）

誤字脱字、感想など受け付けています。

3・初訓練（前書き）

予定じゃもう少し短くなる予定だったのに、どうしてこうなった？

3・初訓練

部屋のブザーが鳴らされ、相手を確認するとその相手は何故か笑顔を浮かべているのは。

何が楽しいのだろうと、ディスプレイに表示される顔を見て考えていたが、いつまでも待たせるのは悪いと思い扉を開く。既に意味不明なロックはこちらが掌握し、代わりとなる指紋認証の鍵を付けておいた。

とりあえず迎え入れてみる。が、扉を開き出会った瞬間に俺は手を引かれ外に連れ出された。

あつれ〜？ コイツも人の話を聞かない人種ですか？ もしかしてまともなのはフェイトしかないというのか！？

「酷いよっ！？」

……てかコイツらは読心術を標準装備してるの？
もしかしてそれがここに配属される為の技能とか？

「てか何で俺はこうして連行されてるの？ もしかして捕まえられるの？」

「そんな訳ないよ！？ さっきも数時間前言ったでしょ？ 私の教導を見学してもらって」

「え？ あれって本気だったの？ 普通に冗談と思ってただけ」

いやいや、何で態々素人さんをそんなところに連れてくの？

「はやてちゃんに確認してもらったけど、ちゃんと魔導師ランクはAランクもあつたら大丈夫だよ。これから教導する皆も最高でBラ

ンクだから、先輩だね?」

「……魔法資質の方はちゃんと見てくれたか?」

確かに俺の魔導師ランクAランクだ。それは認めよう。

しかし、しかしだ

「知ってるよ? 良く魔法資質がFランクでそこまで行けたよね。私もはやてちゃんもすっかり感心したよ」

そうなんだよな。俺って魔法資質が底辺にいるんだよ。

これでAランクが取れたのもデバイスのおかげで、俺の力というものはない。

「………良くそんなことが言えますね」

「何か言ったか、ジーニアス?」

「いえ、何でもありません」

コイツが無茶苦茶高性能のおかげで俺はそんな高ランクまで歩を進めることが出来た。

「それにしてもヘルメスさんのデバイスって良く喋るよね。いいな、レイジングハートはあんまり喋ってくれないからな」

「調整してやろうか? そしたら皆ビツクリするほど良く喋る機体にすることも出来るが」

「あはは……、それは止めてほしいかな」

苦笑いで返された。

むう、一度は隊長陣のデバイスは解析してみたいんだがな。どれほど高スペックなのかねえ。

特にはやての”夜天の書”を解析してみたい。S級ロストログア

なぞ数年に一回解析出来たら良い方だからな。しかも古代ベルカの叡智が詰まってる噂だし。

それを考えると、フェイトのデバイスはあんまり解析する気が起きないな。何て言うかオールラウンダーって見ても、ね？ なのはとかなら砲撃一本だからどんな術式とか調べるのは楽しいんだが。

「…メ…ん、ヘルメスさん？」

「ん？ どうかしたか？」

意識の外から声が聞こえ、思考の海から舞い戻って来ると、眼前になのは顔がドアップで写しだされた。流石に驚き一歩後ずさったが。

だがなのははそんなことを気にしないまま話を続ける。

「いや、もうすぐ着くのに心ここに非ずみたいだったから」

「あゝ、ちよっと考え事をな？」

にしても、コイツはこんなに美人なのにそういうところは気にしないのか？

普通の男ならあそこまで顔を近づけられると勘違いするぞ？ 俺は大分と慣れてるから気にはしないけど、やっぱり男という本能が刺激される。そこは気合で抑え込むのが基本だ。

ルーとかなら妹が甘えてくるみたいで和むのだが、一定の年齢を超えてくると、やっぱりな。

「さ、もうすぐ着きますよ」

手を引いて進むと、そこは開けた広い場所。もっと詳しく言えば綺麗な海岸がそこには存在した。

ふむ、空間シュミレーターか。えらくまた金を掛けたな。俺が作

らなかったら、それこそ桁にビビるほどの値段がするんだよな、これ。まあ俺が作っても結構な値段にはなるけど。

「これは私が全部監修したんだよ。凄いでしょ？」

「まあ教導隊だからなあ。でも作ったのは違う人だろ？」

「そりゃあねえ。私はこういう機械関係はサッパリ。AV機器とかは好きなんだけど」

「いくら教導隊でもこれを作れる奴なんている筈もないだろうけど」

雑談を交えていると、遠くから声が聞こえる。

どうやら件の前線メンバーが到着したようだ。改めてその顔ぶれを確認していくが、やはり若い。最小はルーと同じ年くらいか？

クイントさんの娘さんもまだ16かそこらだった筈だし。本当にこんな若手で大丈夫なのかねえ。俺ならあの手この手を使えば戦わずして勝利出来そうな奴らだし。

それを言えば隊長陣でも出来そうだけど。潔癖症なのは駄目だからな。清濁併せ吞んでこそ一人前を名乗れるというものだ。現に三提督ら管理局のトップに立っているような奴らは全員が出来ている。最高評議会は別だ。あれはただの人類の塵にしか過ぎない。

「よろしくね」

「「「「はいっ！」「」「」」」

あれ？ いつのまにか挨拶が終わってる？

「それじゃ次はヘルメスさんの番だね？」

あ、次は俺ですか、そうですか。

「あゝ、名前はさっき言ったらからわかるよな？」

「アルスマグナさん、でしたよね？」

「まあそうなんだが、別に俺のことはヘルメスって呼んでくれて問題ない。てか出来ればそっちで呼んでほしい。特にチミッコ、お前は敬語なしで頼むな？」

「「ええっ!？」」

そんなに驚くことか？

「生憎と俺にはお前達と同年くらいの妹みたいな奴がいるから、変に敬語で喋られると気持ち悪い。OK？」

「は、はい　じゃなかった、うん」

「わ、わかったよ」

少し戸惑いながらも、ちゃんと言い直してくれるコイツらは素直で良い奴だな。

俺だったら絶対に嫌がらせしてるし。

「よろしい。そっちも別に何て呼んでもいいぞ？　君付けじゃなければ」

「それじゃヘルメスさんで」

「私もそれで」

「OKOK」

こんなもんでいい？　そんな視線を向けるとなのはは綺麗な笑みを向けてくれた。これはOKの印だろう。

俺は一步下がり、後はなのはに全てを任せる。元々俺は参加ではなく見学でいいらしいし。

ゆっくりとその光景を見守っていると、シャーリーが端末を操り空間シュミレーターを展開。その光景に驚く四人。

少し気配を感じて後方を見れば、そこにはシグナムとヴィータの

二名も見られる。大方、まだ私達が教導に加わるには早いってところか。それでもちゃんと見てやるとは本当にいい先生達だ。

「じゃ、早速ターゲットを出していこうか」

今では何故か俺達三人はビル天边。態々ここで見る意味はあるの？

まあ見やすいって言うたら見やすいけどさ。

「まずは軽く八体から」

……それって軽いのか？

一応経歴を見たけど、あいつらの中で実戦を経験した奴はいなかっただろ？ 訓練じゃそんなことはやってない筈だし。

恐るべし”管理局の白い魔王”。初回からここまでのスパルタとは恐れ入るぜ。

「……何か変なこと考えてない？」

「ないない」

「うゝん、そんな気がしたんだけど……。ま、いつか」

だから何でここにいる人間は全員が読心術が使える！？

「私達の仕事は搜索ロストログアの保守管理。その目的の為に私達が戦うことになる相手は」

シャーリーが最後のデータを設定、インプットすると、シュミレーターがそのデータを判断し、それを復元させる。

その姿は本物と全く同一であり、また能力も同様。実体のある幻影といえ一番わかりやすいか。

「ガジェットドローン……か」

「どうかしたの？」

「いや……」

俺の眩きをなのはに拾われたが、今は教導の方が大切だということとで追及はされなかった。

チッ、アイツら関連だと少し神経が敏感になるな。

全く……忌々しい。

「第一回模擬戦訓練。ミッション目的は逃走するターゲット八体を破壊、または捕獲。十五分以内に」

「「「「はいつ！」「」「」

元気がいいねえ。おいちゃんはもう歳だから無理だよ。

「それではミッション スタート！」

なのはの号令と共に、最初のミッションが始まる。それと同時に前線メンバーが行動を開始。

最初に仕掛けるのはクイントさんの娘であるスバル・ナカジマ。データでは陸士訓練校卒業で現在Bランクの陸戦魔導師。一撃一撃に定評があるとのことだが、いやはや。流石はクイントさんの遺伝子。まだ実戦も出ていないヒヨコだが、その威力には眼を見張るものがある。攻撃が避けられたから意味はないけど。攻撃など当ててなんぼだからな。いくら威力があろうと、それが命中しなくては意味がない。にしてもあのローラーブレードのデバイスは中々に面白い。クイントさんもそうだが、あれがあれば陸戦でも機動力は大したものまで跳ね上がるからな。

お次は……エリオ・モンディアルか。

こちらは短期予科訓練校卒業だったか。こっちはスバルよりも才覚があるな。この歳でBランクはそうそういないぞ。本当に天才クラスなら馬鹿みたいなランクだが、普通ならば天才と称されてもおかしாகはない。

攻撃方法は槍型で、確かこの中では珍しい近代ベル力式の使い手。魔力変換資質持ちだったし、伸びしろがある少年だな。鍛え方次第ではオールラウンダーや近接専門といくらでも伸ばせそうだ。

そして

「……………Fの遺産、か」

人造魔導師計画で生み出された人造魔導師でもある。

本物は既に死亡し、その死を受け入れることが出来なかった両親がその禁忌の術に手を出し、それにより生みだされた少年。

それを不幸だとは思わない。もし不幸だと思うなら、エリオに対する侮辱だろうし、またナンバーズにも同様のことが言える。

あー、止め止め。俺にはこんな暗い話は似合わないな。もっと明るくいこうぜ、明るく。

それじゃ次を見てみるとかね。

次はキャロ・ル・ルシエとティアナ・ランスターか。

まずキャロだが、コイツは唯一然保護隊所属保護官で局で働いていた人材か。

その本性は強大な力を宿す召喚士の一族。その強大な力故に部族から追放を受け、局でも精々戦地に単独で投入するしかなかったほ

どだったそうだな。正直、こういうところが嫌いなんだよ、管理局は。まあそれは今はいいか。

魔法についてはブースト系か？ ふむ、ブースト系は中々扱いづらい部類だから。その使い手がいるだけで、前衛はとても負担が軽くなるからこのメンバーにはちょうどいいだろう。

それで司令塔になるのはティアナか。

スバルと同じ陸士訓練校の卒業で、当時からタッグを組んでいたらしい。

珍しい幻影魔法の使い手らしいので、鍛えてみると一番化ける可能性もあるのもコイツだ。

そついや、幻影魔法はティードも得意だったな。やはり妹は兄に似る、か。出来ればこの道には入ってほしくはなかったが、自分の意思でここに来たのなら俺は何も言わない。それに俺が言えることでもないだろう。多分、言えるのは家族であつたティードだけであり、アイツも既にこの世にはいない。

やはり求めるものは復讐だろうか。

綺麗事を述べるならば、そのようなことには意味がないという。が、俺にはそんなことは言えない。俺だって同じような事に逢えばティアナと同じような行動を取るだろうから。

「魔力が消された？」

「そう。ガジェットドローンにはちょっと厄介な性質があるの。攻撃魔力を掻き消すアンチ・マジリング・フィールド、AMF」

さて、これに対してアイツらはどうやって突破するか。

普通ならば魔力攻撃ではなく物理攻撃や、質量を持った物体を制御し、それによって排除するのが基本。

「移動系魔法も困難になる」

他にも色々とあるが、アイツらはそのどれを選ぶのか。
一番早いのはどうにか詰め寄ってスバルが殴ればそれで終いだ。

「初回からえらくハードな訓練内容だな？」

「そうかな？」

「そりゃな。多重弾殻射撃なんかのスキルがあれば突破なんぞ簡単だが、まだアイツらのレベルじゃそれも無理だろ。AMFを前もって見たことがあって、その対策を練っていれば話は別だが、あの反応を見る限り初見は確定。実戦経験のないヒヨッコがあれを初見で突破するのは些かキツイんじゃないか？」

「そうだね。でも、わからないよ？ あの瞳はまだ諦めた瞳じゃない」

そう言っただけで瞳を向けるのは。

そこには未だ闘志を燃やし続ける四人の姿があった。

「……出来るギリギリまで絞り取る、か。やっぱりスパルタだね」

横では黙々とデバイスのデータを取っていくシャーリー。

基本的に六課のデバイス管理は彼女がやってくれるので、本格的に俺の仕事は何なのだろうか。あれか？ 部屋に籠って何か開発でもしてればいいのか？

デバイスを手伝ってんなら手伝うけど、俺が弄ったら絶対にピーキーじゃじゃ馬が出来あがるからな。隊長陣なら問題ないかもしれないが、アイツらにはまだ早い。意見くらいか、出来るのって。

「いい拳だ」

スバルがガジェットに馬乗りになり拳を繰り出す。
一機撃破。

続くはキャロで、自分の召喚獣である子竜に火の玉を噴出される。その熱によって電子機器が逝かれ、行動不能。そこへ無機物の召喚魔法により、三体捕縛。

そこまでしなくても破壊の方が効率がいい気がするが、それでも満点に近い点数を上げられるだろう。

そして最後まで逃れた機体をティアナの狙撃。

スバル達の援護があつたので完了したが、それでも

「へえ？ 荒削りだが多重弾殻射撃まで出来るのか。まだBランクなのに良くAAランクのスキルが使えるな」

「AAランク！？」

「ん？ ああ、シャーリーは知らないか。今、ティアナが使った魔法は多重弾殻射撃と呼ばれるものに属するもので、そのスキル難度AA。”射撃型最初の奥義”とまで言われる存在なんだが、まさかティアナがそこまで使えるとは思ってもしなかった」

正直、この中で一番使えるのは間違いなくティアナだろう。

射撃と幻術。これだけで大抵の相手は完封出来る布陣だ。今でも周りをよく見れる”眼”も持つてるし、中々作戦の立て方も荒削りだが合格範囲。流石はティーダの妹だ。

「さ、ミッションコンプリートだな」

「うん。それじゃ、皆のところに行こっか」

中々面白いメンバーじゃないか。

これで少しは暇つぶしは出来そうかねえ。

3・初訓練（後書き）

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

4・総評

俺達三人はビルの天辺から下り、四人がへバツテいる場所まで歩く。

初めての模擬訓練と、初めて遭遇する敵ということで、全員が肩で息をしていた。一番酷いのはティアナで、未だ大の字で地面へ寝転がっていた。

訓練内容は上出来と称してもいいが、これからの課題は体力をつけような？

「はい。皆、初めての訓練お疲れ様」

なのはの言葉に反応出来ているのはスバルとエリオくらい。

まあ目線がそっちに向いてるから聞こええいるのは間違いないだろう。

「訓練の総評だけど……ヘルメスさん、やってくれるかな？」

「はあ？ んなもんなのはの仕事だろ？ 職務放棄か？」

「そう言う訳じゃないんだけど……、やっぱりたまには自分以外の視点で聞いてみたいとわからないことが多いから、ね？」

「はあ……タクツ」

コイツ、元々これをさせる為に俺を連れてきたな？

「あゝ、まずスバル」

「あ、はいっ！」

「一撃一撃の攻撃力はデータにも書いてあった通り光るものがある」

「あ、ありがとうございますっ！」「だ、が」へ？」

呆けた顔をしゃがって……

「それを当てられないんじゃない意味がない。今回も最後以外は攻撃当たっていなかったな？」

「う……」

「最後の方法も別に間違いじゃないが、危険なことは変わらない。それはわかるな？」

「はい……」

馬乗りの状態だと確かに一撃必殺も出来るだろうが、後ろからの強襲とかにはほぼ絶対的に反応し切れない。

「一番ベストな選択だったのはガジェットを自分の拳が入るところまで誘導する、それか小刻みのパンチで動きを止めてから叩きこむとかだな」

少しそこに立てと俺は指示。

疑問顔のスバルだが、俺は話を進めていく。

「ガジェット関連には効果が薄いかもしれないが、対人ならば効果は絶大だ。少し撃ちこんでこい」

「いいんですか？」

「ああ、遠慮なく、な」

「わかりましたっ！」

そうして真正面から撃ちこんでくる。もう少しは虚実を入り混じらせろよ……

俺はそれを右手で払いのけて、腹に掌底をかます。掌底は浸透系の攻撃なのでバリアジャケットを着てようとそれなりのダメージが入る。

それによつて動きが一時的に止まった刹那に、零距离から腰の捻りなどを連動させスバルの眼前で右拳を寸止め。

「対人戦には一撃必殺なんかは必要ない。これはガジェット戦でも言えることだ。一撃必殺つてのは砲撃とかで十分なんだよ」

「……」

「スバルの課題はそういったコンビネーションや虚実を入り混じつた攻撃方法の模索だ。わかつたか？」

「は、はいっ！」

んじゃ次は

「エリオだな。エリオはそうだな……あんまり言うことがないんだよなあ」

「そうなの？」

エリオも質問してくるが、正直なあ。

「エリオはまだ10歳。キャロみたいにある程度方向性が決まったら話は別だが、お前はフェイトみたいにオールランダーにもなれるし、シグナムみたいに近接特化型にも慣れるから、それが決まるまでは基本を伸ばすしか良い方法はない」

「フェイトさんやシグナム副隊長みたいに、つてこと？」

「ああ。もしお前が将来どんな魔導師になりたいのか既に決まってるならそれに沿ってアドバイスするが……まだ決まってるないだろ？」

「……うん」

「ああそんなに落ち込むな。それが普通だから問題なんてねえよ。とりあえずだ！」

これ以上言ったらエリオが鬱に入りそうだな。

「エリオの場合は近、中、遠と全体をカバー出来るから全部を一通り試してみて、それで自分に合う距離つてのを見つけるが最初の課題だな」

「うんっ！」

よし切り抜かれた。残るは二人だな。

後の二人はある程度方向性が決まってるからアドバイスが楽しい。

スバルの場合もクイントさんみたいな感じに将来するのがベストだろう。

「次はキャラだが、キャラは召喚＋補助でほぼ決まりだからそこを鍛えて行くのがいいな。少しは攻撃魔法も覚えるのもいいが、まずは補助。ブースト魔法を鍛えるのがいいかね。前衛を出来るのは二人いるから特に攻撃も必要ないだろうし、もし必要だとしてもそこは召喚士の腕の見せ所だからな」

「じゃあ私は補助中心でいいのかな？」

「ブースト以外にも適正があるのなら回復魔法に手を出すのもいいな。ここには”湖の騎士”がいるから回復魔法の先生にちょうどいいだろ」

こんな感じでキョロもOK。

最後は

「ティアナだな」

「はい」

「お前は」

「……」

ふむ、中々溜めてみるつても面白いな。
見てみるよ、あの不安そうな顔。ププッ。
っと、いけない。少し面白すぎて理性の抑えが利かなかった。

「そんな心配そうな顔をするな」

「へ？」

「俺の眼から見る限り、お前がこの中で一番完成されてるし、間違
いなく一番伸びる存在だ」
「……」

完全に呆けている。

どうせ自分には魔力ランクが劣っているからとかいうことで劣等
感でも持っていたのだろう。

俺から言わせてもらえば、魔力ランクなどいくらでもどうにか出
来る方法は存在する。

「現に、お前は既に多重弾殻射撃が出来ていた。それだけでもお前
はこの中じゃ頭一つ飛びぬけている証拠だ」

「……はいっ」

「それに今回は使わなかったが、お前は幻影魔法も使えるだろう？」

「は、はい。ですが、何故それを？」

「んなもんデータベースを覗き見たら判ることだ。まあ今は置いて
おいて、その幻影魔法というものは使い方によったら、今の状態で
もものは一撃くらいは入れられるほどの可能性を秘めてるんだぞ
？」

「な、なのはさんにですか……？ そんな馬鹿な」

現にお前の兄はそれでSランクの魔導師を単身で落とすきつて
るからな。

「俺も少し前にお前と同じように幻影魔法の使い手に知り合いがいたよ。そいつは魔力ランクでは圧倒的に劣っていたが、その幻影魔法と自分の技術のみでSランクの魔導師を撃墜している」

「……本当ですか？」

「ああ、だからお前は経験と魔力運用の強化がこれからの課題だ。後は指揮経験も必要だな」

多分だが、コイツは単体でもやれるだろうが、一番成果が出るのはツーマンセルまたはフォーマンセルくらいの小規模の団体戦が輝くだろう。

「あ、ありがとうございますっ！」

本当に嬉しそうに頭を下げるな。

「最後に全員に、俺の自論だが、自分の才能に足を止めるな」

才能があるからと言って訓練などを止めると、そこで成長は止まってしまう。

どれだけ光り輝く宝石だろうと、たまには磨いてやらないと本来の輝きが失せてしまうように。

「確かに才能というものは強大だ。スタートラインが人より十数メートル先だからな。だが、それに追いつけないということはない。どうすれば追いつけるか、わかるな？」

「努力、でしょうか」

「正解だ。だが、努力と言っても我武者羅にやることには意味がない。それじゃ逆に身体を壊す原因になる」

それを言った瞬間、なのはは何故か苦い顔をした。

どうかしたのかと思い、データベースの情報を思い出してみると、そう言えば彼女は一度空から墮とされていたということを思い出す。墮ちた原因が過剰の労働による疲れの蓄積。それと同時に重傷を負い、一度は復帰すら危ぶまれたがどうにか帰って来たらしい。

「だから、まず自分に何か足りないと感じたならば誰かしらに相談するといい。決して一人で抱え込むな？ 絶対に潰れるからな。以上」

俺の声と共に、最初の訓練は終了を告げた。

「うん、やっぱりヘルメスさんに頼んでよかったな」

去っていく四人を見据えながらなのははそう呟く。
俺としては面倒なのは嫌いなんだけどねえ。

「アドバイスも的確だし、メンタルケアも万全。私よりも教導官に向いてるんじゃないかな？」

「俺は人に教える柄じゃないからなあ。後方でせつせと何か開発してるの方が好きだし気が楽だ」

「もう……」

夕暮れの海岸線はそれだけで幻想的な雰囲気を漂わせる。

シャーリーも四人に付いて行ったので、今ここに居るのは二人だけ。

「……身体を壊す、か」

「昔のことでも思い出してるのか？」

「何で……、って知ってるか。データベースの情報を見るから」
「そういうことだ」

しみじみと時間は流れてく。

「あの頃はただ必死だったんだよね。自分は役に立って、私は役立たずじゃないってことを証明する為に」

局に入る以前の情報は流石に俺も持ち合わせてはいない。

多分、なのはの根幹を作る原因になった事件があったのだろう。
そうでなければ、なのはは歪すぎる。いや、それを言えば、この六課にいる人間は全てどこかにそれを抱えているのかもしれない。

「今は違うんだろ？」

「うん。教えて貰ったから。皆に」

「なら気に病むな。確かに過去を割り切ったり振り切ったりするのは駄目だが、それを忘れて良いということもない。ただその事実を抱え進むしか方法はない」

静寂が流れる。

「そっか。うん、そうだよな。私は私なんだから」

「そういうことだ。過去があるからこそ現在いまがある。過去を忘れれば現在はどうなる？」

「なくなっちゃうよね……」

「ああ、だからいくら辛いことでも忘れてはいけない。ま、これは受け売りの言葉だけどな」

俺を救いあげてくれた馬鹿みたいに馬鹿優しい人達。

「さ、そろそろ夜風が冷たくなる頃だから帰るぞ。風邪でも引いたらたまったもんじゃないからな」
「そうだね」

吹き抜ける風は確かに冷たかったが、それと同時にどこか温かみを感じた。

4・総評（後書き）

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

5・厄日（前書き）

お気に入り登録100人突破！
これからもよろしく願いします。

5・厄日

既に俺はなのはと隊舎に戻り、なのはは今日の教導の内容を纏める為に、俺は休息を取る為に自分の部屋へと戻っていた。

時刻はそろそろ18時を回り、夕食の時間帯と呼べるほど。腹も空いたし、そろそろ食堂にでも向かうかね。

部屋から外に出て、俺は食堂へと目指す。

道行く人から逢う度に会釈されんだが、何でだろ？ あれか、俺が副局長だったから？んなこと別に気にせんでもいいのに。

そんなことを思いながら、ようやく食堂に到着。そこで俺はありえないものを眼にしまった。

「あ、ヘルメスさん！」

「よ、よう……」

そこにいたのはフォワードメンバーの四人。ただそれだけなら良かった。しかし、その中の二人、具体的に言うトスバルとエリオだ。

「お前らご飯の量を一寸間違ってないか？」

「そうかな？」

「別にそんなことはないと思うけど」

皿から溢れんばかり盛られているスパゲッティ。それから色とりどりのサラダ。こちらは見ているだけでお腹が一杯になってくる。何故か同席を勧められたので一応その申し出を受けておく。でも一緒にいたら絶対に食える気がしないんだけど。

そんなことを思いながら自分の分の夕食を取りに行く。

確かにクイントさんの遺伝子を受け継いでいるのなら予測出来たことではあるが、エリオは違うだろう？

何なの、あの大食いコンビは。どういう身体の構造してる？一回真面目に調べてみたいんだけど。

「良く一緒になってご飯が食べられるな」

「もう慣れました……」

これに慣れるって、俺は尊敬するぞ。

グツタリとしているティアナに、苦笑い気味のキャロ。

俺は極力大食いの二人を視界に収めないでご飯を消化していく。ふむ、予想以上に美味しいな。良い料理人を雇ってる。

「そう言えば、ヘルメスさんって教導経験があるんですか？」

俺が半分くらいを消化しきると、急にティアナが口を開く。

「ん〜？ 別にないけど、何でそう思ったんだ？」

「いえ、今日の総評も物凄く詳しくかったし、色々な技術なんか知っていたので、てっきりそうなのかなあ、と」

まあ、確かに色々な技術には手を出してるけど別段教導をしたことはない。

これは趣味みたいなものだし、魔法関連は爺さん婆さんの望みを叶えてやってたら何時の間にかついた知識だし。

「ならヘルメスって魔導師なの？」

「一応、てところだな」

「一応って？」

「まあ魔導師ランクは確かにAランクなんだが、魔力ランクはFランクなわけだ。だから正直魔導師って言っているのかわかんねえんだよ」

沈黙。

そして次に起こるものは爆発。

「『ええーッ!?』」

「お前ら五月蠅いぞ。見る、他の人が皆コツチ見てるじゃねえか」

もし立ち入り禁止とかにでもなったらどうしてくれるんだ。

俺は流石に料理スキルまで持ち合わせていないから滅茶苦茶困るんだが。

「魔力資質がFランクで魔導師Aランクってどういうバグですか?!?」

「バグって酷いくね? ただ俺が作ったデバイスが廃スペックだから罷り通っただけだし、な? ジーニアス」

『どの口でそんなことを言うんですか……』

むう、これでも感謝してるんだが。

『感謝されるのは嫌じゃありませんが、マスターが無駄に卑下するのを聞くのは嫌いなんです』

と、まあこんな感じで今日の夕食は終了。

俺に関することあやふやとなり流されていった。

「おいちよつと待たね？ 何これ、公開処刑？」

現在、俺が立っている場所は昨日フォワード達が訓練した海上シユミレーター。

今回の設定は完全なる更地で、障害物などは何一つ存在しない。って、そんなことはどうだっていい。

「どうして俺はここにいるの？」

「だから言っているだろう？ 皆がお前の实力を見てみたいんだ。魔力ランクは底辺のFランクしかないというのにエースクラスの実力を出せるお前のな」

「……どう思う？ これって完全に虐めって捉えても間違いじゃないよね？ 裁判したら俺絶対に勝訴出来る自信あるもん」

「グダグダ言わず掛かって来い！」

眼の前の騎士は絶対に俺の方が階級が高いことを忘れていやがる。クソッ、ならば！

「なのは、フェイト！」

「「……（無言で両手を合わせている）」」

Shit！ この世に神はいないのか！？

ニーチエという偉人が言った通り、”神は死んだ”のか！？

『マスター、早々に覚悟を決めることを勧めます。情報を見る限り、件の騎士はバトルジャンキーです。いくら正論を述べようと無茶が帰って来るだけで、時間の無駄かと』

「……やっぱり？」

『はい、間違いなく』

はあ……

何でこんなことになるかね？ 俺は戦いとかあんまり好きじゃないんだよ？

付き合いくらいのはやるけど、本格的なのは爺さん達とだけにしてくれ。大体、爺さん達とやるのも嫌なんだけどな。

『何だかんだ言いながら付き合うマスターはやっぱ甘いですね』
「……まあな。タクツ、仕方ないな」

俺は懷からジーニースを取りだす。

その様子に笑みを深めるシグナム。うわあ、完全にバトルジャンキーだよ。何あれ、もう何か同じ人間とは、ってよくよく考えたらシグナムは普通の人間じゃなかったっけ。

まあんなことはあんまり関係ない。

どちらにしろ、戦闘狂みたいな奴はお断りなんだけど。

「これが最初で最後だからな？」

「ああ、わかっている。さあ、行くぞ！」

「本当にわかってんのか？ ジーニース、セットアップ」

『セットアップ 完了。バリアジャケット展開します』

その言葉と共に、普段着ている服が虚空へと消え去り、代わりに魔導師の服であるバリアジャケットが展開される。

一応ベルカ式である騎士甲冑も登録しているが、俺としてはコチラの方が好みなのでいつもこちらを使用する。

どちらも少しだけしか効果は変わらず、ほとんど同じようなものなので気にする事は特に無い。

そして手に現れるジーニース。

デバイスの形状としては杖に分類されるそれを、俺は握った。

「それじゃ、さっさとおっぱじめるか」

開始の言葉などは不要だったらしい。

俺がそう言った瞬間にシグナムは突っ込んできた。

一応下には観客が多く集まり、はやてが開始を宣言しようとしていたのに……可哀想。

そんなこと感想を持つことは勿論良いことなのだが、如何せん今はそんな余裕が存在しない。

一直線に突っ込んでくるシグナムに、とりあえず様子見の意味を込めて魔力弾を放つ。

「アクセルシューター、数は50。内、20を発射し10を第二波、残りを第三波として発射」

『了解しました』

次の瞬間、俺の周りには黒色の魔力弾が50展開される。

この数にシグナムも観客も驚いた声を上げたが、俺は気にせず発射する。

アクセルシューターは誘導追尾性能を持つ魔力弾で、こうした中距離では中々の戦力となる。

慣れてくればいくらかでも数を増やすことも出来、また消費魔力もそこまで大きくないので俺みたいに魔力の少ない人間でも容易に発動が出来る。

『訳ないでしょう、マスター』

「言ってみたかったんだ」

いくらなんでも言い過ぎだが、それでも魔力消費は運用等に気を付ければ本当に微量で済む。

俺は少し裏技を使っているの”魔力”に関しては特に気にすることは無い。

しかし流石はニアSランクの騎士。それも生粋の古代ベルカ騎士だ。

本来なら捌ききることは難しいシューターを切り捨てて前進してくるか。一応前後左右の動かしただが全てを斬り伏せられた。

「流石はヴォルケンリッターのリーダーだ。幾千もの戦場を渡り歩いただけはある」

「マスターも似たようなものじゃないですか。”SSSランク”の魔導師を”同時に二人”相手して同格って、普通なら考えられませんかよ」

「そりゃあそれは全力も全力だからな。俺の発明品をふんだんに使ってるし。それでも引き分けにしか持っていけなかったんだがな」

「相手方もマスターが作り上げたデバイスを使っているからです。あれがマスター以外が作り上げたデバイスなら勝負にすらならないでしょう」

続々とシューターを打ちこむが、それすらを斬り伏せ、とうとう俺の眼前までやってくる。

そのまま袈裟がけに一閃を打ちこんでくるが、甘い。

「疾イッ！」

「なっ！？　グウッ！」

誰が近接戦闘が出来ないと言った？

俺はジーニアスを下から掬い上げるように迎撃。その瞬間に物理

物質加速魔法をジーニアスに付加させ打ち込む。

常人ならそれだけで痺れるか武器を落とすほどの衝撃を発生させるそれをまともジグナムは受ける。が、それでもそのまま鏢競りに持っていかれた。

「アクセルシューターもそうだが、まさかここまでの戦闘が出来るとはな……ッ！」

「俺としてはしんどいからもう終わりにしない？」

「まさかつ。こんなに楽しい時間を終わらせる筈がないだろ？」

どうやら俺の不運はまだまだ続くようだ……

5・厄日（後書き）

作者「今日から俺も他者様がやってるようなあとがき形式に変更してみるか？」

ヘル「いや、本当にイキナリだな？」

作者「んなことは気にしないでいいんだよ。にしてもお前本当にあれだな、あれ」

ヘル「あれって何だよ？」

作者「不運で強いって、まんまどつかの主人公だな（笑）」

ヘル「五月蠅いっ！ てか俺は一応主人公だから問題ねえだろ！？」

作者「あゝ、そっぴやそうだったな？（笑）」

ヘル「扱いが酷すぎるっ！？」

6 ・決着（前書き）

どうやったら感想は増えるんだろ……？

PV数とかは一定で増えてるからそこまで不安じゃないけど、感想が少ないと誰も読んでないのかな、と錯覚してしまう（汗

6・決着

「ならば少々コチラも本気で行かせて貰うぞ？」

「却下だ、ボケッ！」

鏢競り状態で拮抗していたところを無理矢理距離を取られる。

それと同時にガシャンとカートリッジをロードする音。シグナムが持つ魔力変換資質”炎熱”が刀身に渦巻いている。

それを見た俺の顔は大層引き攣っているだろう。だって今でも滅茶苦茶想像出来るし。

正直、ここで堕ちておいたら楽なのだが、如何せん俺は負けず嫌いだ。それにわざと当たれば痛いし、何よりシグナムにバレたら再選の要求は間違いない。

俺は溜息を零し、そしてジーニアスに命を下す。

「

」

『了解しました、マスター』

俺の手に握られているジーニアスの構造が変化。

杖状だったのが、薙刀へと形を変える。刃渡りは全長の半分と中々に長いコレは、適当に組み込んでみた形状変換の一つ。

轟々と燃え滾るそれに対抗するには、冷々たる氷

「受けてみる”紫電一閃”！」

「凍花一閃”！」

炎と氷が両者の間でぶつかり合い、爆発が起こる。

「まさか紫電一閃すら防がれるとは　ッ!？」

「油断大敵だ」

俺は返す刃で背後から強襲。

「　雷鳴一閃」

刃は何者にも防がれることなくシグナムの背中に突き刺さり、纏う雷が身体を焼く。

感電し意識を飛ばしたシグナムはそのまま地に伏せた。

「あー、疲れた……」

『嘘を言わないでください。これくらいの戦闘、屁でもないでしょう?』

「精神的にはどっとクルんだよ……」

無駄に晴れ晴れとした青い空が異様にムカついた。

side フェイト

どういうことか、何故かヘルメスとシグナムが模擬戦をすることになった。

事の経緯をシグナムに尋ねてみると「奴の力量が知りたくなった」とのこと。またいつものバトルジャンキーがここでも出ていた。

私もなのはも必死で止めようとしたが聞かず、またはやてもちようどいいと言って取り合わなかった。

あのね?　一応ヘルメスは私達の上司なんだがら、もう少し敬意を払わなくちゃいけないんじゃないかな?

なのにもそう言ってみたけど、帰って来たのは苦笑のみ。

ゴメンね、ヘルメス。私達じゃどうすることも出来ないみたい。こっちを向いてきても私達は合唱するしかないや。

あ、諦めたみたい。

仕方ないな、みたいな表情でデバイスをセットアップする。

確か名前はジーニアスだったっけ？ はやてが言うには”天才”
っていう意味らしい。

魔法体系は……ミッドチルダ式か。ならなのはみたいなタイプかな？ でも魔力資質は低いし……、どっちかって言うとシグナムにみたいに玄人みたいな戦いかな？

こう、いざ戦うことが決まると私もわくわくしてくる。それはなのはも同じなようで、一挙一頭足を見逃さないように真剣な表情で二人を見守っている。

「それじゃ って無視すんなやつ！」

はやての開始を待つことなく、シグナムがヘルメスに向かって駆け出す。

あはは、二人とも外はもう意識してないのかな？ シグナムはいつものと同じだけど。

空間モニターに映る二人は本当に対照的だ。片や闘気を漲らせ、片ややる気がなくダラケテいる。

「アクセルシューター、数は50。内、20を発射し10を第二波、残りを第三波として発射」

え？、とそんな声が出る間もなく、ヘルメスは宣言通りにシュータを展開する。

「えっ！？ シューター50って私より上っ！？」
「というよりどこからそんな魔力が！？」

それは予想外の一言に尽きた。

シューターは確かに魔力消費が少なく、技術的にも一般、というよりも初級の技だ。

だけど、それは一つ一つに限っての話で、同時に展開するには倍々計算のような魔力と、それを上回る魔力制御が必要とされる。

私はそれが苦手で誘導弾はそこまでの数は行使出来ず、はやては論外。唯一”砲撃魔法の天才”とされるなのでも同時制御は32が現界。

それなのにヘルメスのは悠々とそれを超える数を制御しきる。あの顔を見るにまだまだ制御出来る数は多そうだ。

「本当にあれでAランクの魔導師……？ 私はSランクって言われ
ても信じちゃうよ」

「認定試験を受けてなかったとか？ でも、それだと魔力のことが
説明出来ないし」

そんな会話をしていても戦闘は進んで行く。

放たれたシューターはシグナムへと迫り、それを全て斬り払って
直進していく。流石はシグナム。腕は衰えるどころか研ぎ澄まされ
てるね。

「うわぁ……、あれだと完全に魔法制御能力とかは抜かれてるや」
「なのはでも？」

「うん。まあ私はそこまで得意っていうほどじゃないんだけどね。
私の場合は遠距離からの砲撃がメインだし」

そうだ。彼女の本领は遠、または超遠距離からの収縮魔法。

「なのはが使う”スターライトブレイカー”だけは、幼馴染である私もはやても瞬間最大火力では一步劣る。」

「あ、そろそろシグナムさんの間合いだね」

「ヘルメスはどうやって対抗するんだろ？」

あのデバイスの形状を見る限り、ヘルメスさんのセンターガードだろう。

センターガードというのは得てして近距離は苦手だ。元々の間合いが中、遠距離での制圧が基本だからね。

「つて、ええ！？」

空間モニターに映るそれは、確かにシグナムの斬撃を斬撃を以て防いでるヘルメスの姿があった。

その光景には度肝を抜かれ、はやてなど口をあぐりと大きく開き茫然としている。

「近距離も対応するって、ヘルメスさん凄過ぎだよ」

なのはの言う通りだ。

最早ヘルメスのポジションは私と似た、ガードウィングかオールラウンダーと言って差し支えない。

あれでもシグナムは騎士の中でもトップの実力持つ存在だし、こゝと近接面に関してならば私より上。それなのにヘルメスは易々と彼女の斬撃を真正面から防いだ。

私でもザンバーモードじゃなかったら力負けするそれを、まさか杖で防ぎきるなんて……

「カートリッジ……、シグナムさんもエンジンが掛かって来たね」
「うん。とすると」

放たれる技は、シグナムが持つ技の中で一番信頼されている魔力付与攻撃。

魔力変換資質”炎熱”を用いて放たれるそれは、並みのデバイスなら真つ二つに両断出来る威力を持つ。

私も初めて出会った時は両断されたのは良い思い出。

「あれ？　ねえフェイトちゃん。さっきヘルメスさん何か言った？」
「うーん、音声では拾われなかったのかな？　私も微かに口が動いた気がするんだけど」

若干の疑問を胸に抱きながら、これからの展開を見守る。

するとヘルメスのデバイスが姿を変え、さきほどまで杖だったのは今では薙刀へと変わった。

あれはデバイスが持つ形状変換……。

「”紫電”」

「”凍花”」

「あれって!？」

ヘルメスのデバイスに普通では起こり得ない現象が起こる。

それは魔力変換資質の一つであり、また一番珍しいとまで言われる”凍結”。それがヘルメスのデバイスには纏わっていた。

まさか魔力変換資質まで持つてるの!？

「”一閃”!」

二人の斬撃が中ほどでぶつかり合い、爆発を起こす。

普通ならば起こらない爆発だが、その原因は二人が纏わらせた魔力にある。普通の魔力なら外界にそれほど影響を与えないのだが、魔力変換資質とは、魔力を外界に存在するエネルギーへと変換しているからである。確かに変換されたエネルギーは外界に元から存在するエネルギーとは少し違うが、炎や氷と言った、それ単体で影響を及ぼす存在を両者からぶつけあえば、それはエネルギー同士が反発する。その為に、さきほどは大きな爆発が起こったのだ。

「ヘルメスさんは……」

「ッ！ 後ろっ！？」

煙に隠れ見えなくなったヘルメスは、いつのまにかシグナムの後ろにその姿を移動させている。

そのまま振りかぶられた斬撃には、私が良く使うそれが纏わっていた。

「雷鳴一閃」

そのまま斬撃はシグナムの背中を切りつけ、シグナムは倒れ伏せた。

「まさかヘルメスさんが勝っちゃうなんて……」

「いくらリミッターと掛けてるとは言え、それでもランクはA-。確かにランク面言えばヘルメスが勝ってるけど、経験とかを合わせれば十分シグナムの方が上の筈んだけど、ね」

「あゝ、今回の勝負はヘルメスさんの勝ちで終いやっ！ 皆は自分の仕事場に帰りやあゝ。あ、ヘルメスさんはシグナムを連れてきてくれるか？」

『あいよつと』

そういて今回の模擬戦は終わりを告げた。

しかし、多くのメンバー、私やなのは、はやてとシャマルにシャ
ーリー、後はフォワードの面々は聞きたいことがあるので普通に残
っていた。

まあ、あれだけ謎の残る戦闘をされたら誰だつて、ね？

顔を見合わせた私となのはは共に苦笑が浮かんだ。

6・決着（後書き）

ヘル「滅茶苦茶チートだな」

作者「だからキーワードには“ある意味チートで最強”って書いてるだろ？」

ヘル「いや、普通に最強やチートで良かった気がする」

作者「でもお前単体だと普通に弱いからな。だから“ある意味チートで最強”なんだよ」

ヘル「まあ納得するけどさ」

7・説明（前書き）

そろそろヒロインを考えなくていけないか、正直どうしようかな。
誰か案でもくれたらいいんだけど……
アンケートでも取ってみるかな？

7・説明

「はいよつと」

抱えていたシグナムを湖の騎士が持つてきた担架へと寝転がす。
外的な損傷はなく、感電による一時的な気絶なのでそのうち眼を
覚ますだろう。

「初めまして、シャマルです」

「湖の騎士シャマル・八神医務官か。俺は普通にヘルメスって呼んでくれ」

肩をゴキゴキと鳴らしながら、模擬戦が終わったのに、未だこの
場に残り続けている奴らの下へと向かう。

にしても何でまだ残ってるの？ お前ら仕事があるだろ？ 特にはやて。お前、新設の部隊って色んな種類の、それも膨大な量の書類を処理しなくちゃ駄目だろ？ こんなとこで油売っていいのか？

「そう言われても、アンタの謎を解く方が先や！」

「……」

「はやてちゃん、人に指差したら駄目だよ？」

締りがないし、なのは言う通りだ。お前は親から　つと、これは失言だな。んっ、一般常識というものが欠落しているのか？俺の呆れた視線は居心地が悪かったのか、咳で誤魔化し、先ほどのことをなかったことにする。

それに向かう九つの冷たい視線。あ、涙目になってきた。

「そ、そんなことはええねん。それで、ヘルメスさんっ！　あの書

類嘘やなっ！？　いくらAランクでもうちのシグナムをあないも簡単に倒せる筈がないで！」

ビシッ、とまた指を突き付けられる。

はやて、お前何かの推理番組の見過ぎじゃないのか？

「指を下せ、ド阿保。後、書類に一切の間違ひはない。俺は正真正銘のAランクだ」

まあ言われるだろうと思った質問だ。

いくらランクで勝つていようと、俺が戦ったのは歴戦の兵だ。そう簡単に勝てる相手ではなかった。

「なら何であないにシューターを展開出来るん？　なのはちゃんでもあの数は無理やで？」

「そうなんですか？」

会話に混ざって来るフォワード陣。

「そうだね。私でも最高で32が限界。それ以上だと制御出来なくて暴発するから」

「へえ……」

「まあ魔法制御能力が高いからと言っておく」

「なら何であの数のシューターを展開出来たんや？　アンタの魔力じゃ10が関の山やろ？」

「それはコイツのおかげ」

俺が彼女達に見せたのは、俺の相棒でるジーニアス。

「デバイスのおかげ？」

「ああ。コイツは高性能を超えた化物性能だからな。まあ答えを言うと、コイツは常時周りの魔力素を取り込み、使用者　つまり俺の魔力に還元出来るシステムを搭載している。だからいくら俺の魔力が低かろうと、この世界の魔力が尽きない限り、俺が扱える魔力も尽きない。世界の魔力が尽きることなど到底ありえないから、したがって俺の魔力も尽きないということだ」

ポカーンとした顔を晒すメンバー全員。

そりゃまあそうなるわな。スカさんもこれを聞いた時同じ反応だったし、爺さん婆さん達も同様。

「……実質は魔力ランクEXという訳だな？」
「そうだ、って起きたのか」

その中で最初に口を開けたのが、今まで気絶していたシグナムだった。

「聞こえていたのか？」
「うっすらとだけな。ただ身体を動かすまでは至らなかったが」
「それはよかった」

美人さんを傷つける趣味は俺は持ってないからな。

「魔力無限って……、もう無茶苦茶や」
「と言っても、これがなかったら俺は何も出来ないけどな」

ハハハッと笑ってみる。結果　失敗。
疑わしい視線が増えただけ。正直反省している、だが後悔はしていない。

「でもそれって常時ブーストしてるみたいなものじゃないの？」

「あ、そう言えばそうだね。身体に負担とかはない？ 大丈夫？」

「ん、厳密にはブースターとは違うからな。だからデメリットはなしに近い」

まあ俺の場合、自分で生成出来る魔力が少ないだけで、それを受ける器は馬鹿みたいに大きい、らしい。

だから外からいくらでも魔力を身体に取りこめるのだ。まあそこんところも考えた術式を組み込んでるから、一般人でも何ら問題はないけど。

「それって私達でも使えますか？」

「ティア？」

「……使えることには使える」

「ならっ」だが、それは俺が気に入った人間にしか、俺はこの機構を取り付けない」気に入った？」

大方、今の自分じゃ力が足りていないとこの馬鹿は思っているのだろう。

俺がこの間に言った言葉をもう忘れたのか？

「ああ、俺以外でこの機構を使っているのは10にも満たない。内、現役で前線に出てるのは二人だけだ。それだけこの機構には慎重に成らざるを得ない。何故かはわかるな？」

「はい……」

こんな機構が一般に出回れば、今の魔法体系はすぐさま崩れ去るだろう。

それと同時に犯罪者も活気づいてしまう。

以前、この劣化番とも言える外部リンカーコアでさえ、上層部

はそれを恐れて俺の案を消し飛ばした程だ。

それ以上のものだと思像することは簡単である。

「こんなとこでいいか？」

「まだあるよ？」

「うえっ……」

そんなにこやかな顔で言われても面倒なものは変わりないんだぞ？
てか模擬戦の前まではあれほど俺を労わってくれてたのに、今ではこの様か。なのは、フェイトよ、俺はお前達ことを思い違いをしていのか？

「ヘルメスって魔力変換資質を持ってたの？ 資料には書いてなかったけど」

「そうや！ ”凍結”なんてうちのリインか、若干クロノ君が使えるくらいしかうちは見たことないで」

「あゝ、あれは天然物じゃなくて、技術でそれっぽくしてるだけだから、厳密に言つと魔力変換”資質”じゃないんだ。言わば魔力変換”技術”とでも言うべきか」

あれはそういうの術式を組んで、その適正があればすぐに使えるもの。

まあ要練習だが、早ければ一月くらいで物になる。ただ、現在でその術式を知っているのはごく少数。多分俺の知り合い以外は知らない筈だ。これも俺が生み出した技術だし。

「もういい？」

「最後に一つ」

「まだあんのかよ……」

もう勘弁してくれ……

「最後の私の後ろから強襲したが、あれはどうやって？ 私は爆発の後もお前をしつかりと捉えていたが、強襲される刹那の前でお前を見失って気絶したんだが」

「ああ、そっぴやそっぴやっぴや。うちらの場合は煙で見えなかったから高速移動でもしたとてつきり……」

「あれ？ あれは前以てジーニアスに術式を組んで貰っておいて、シグナムとぶつかり合った後にその術式を起動。んでから後ろを取った後に斬撃ってな感じ」

「まさか近距離の転送魔法を？」

「そっぴや……、何かおかしいか？」

別段おかしいことはない筈だが。

「それって十分凄いでしょ！？ 近距離とは言え、転送魔法って膨大な情報を処理しないといけないんだよ？」

「だから前以てって言ったろ？」

別に瞬間処理をしようと思えば出来るが、それをするくらいなら普通に動いた方が効率がいい。

強襲等なら考えるが、一対一の真正面から使っても、爺さん達相手なら普通に避けられるからな、コレ。

アイツらは全員感覚器官がイカれてるから、気配だけで全部反応してくる。試しに眼にハチマキをして魔力弾をバラまいてみたけど普通に避けてたからな。

「ま、いくら魔力ランクが低かろうと頑張ればどうとでもなるというのがわかっただろ？ 別に俺みたいなデバイスがなくても、魔力制御が得意ならカートリッジを連打してくる奴もいるからな」

あれにはビビッた。まさかあそこまで馬鹿な奴がいるとは思って
いなかったからな。

確かに理論上では可能だが、それを実際にやるのとは大違いな
のに、アイツはそれをやり遂げて俺と相対して来たからな。

「カートリッジを連打て……、なのはちゃんやあるまいし」

「はやてちゃん？ それってどういう意味？」

「どういう意味って、そのまんまやんか。あれだけカートリッジを
連打しといて言ういわ。それで負担も多いのわかってんのに、ほ
んま見てる方は滅茶苦茶心配すんやからな？」

「そうだよ？ 私やはやてがどれだけ心配してるかわかってるの？」

「あははは……」

「あゝ、何か俺はもう用済みですか？ はい、そうですね」

何か周りは俺のことが眼に入っていないみたい。

うう、頑張ったのにこの仕打ち。酷過ぎる。扱いの改善を要求す
る！

「……帰るか」

未だ攻め立てる二人と、それに苦笑いが一人。アワアワする四人
と苦笑で傍観が一人、最後にうふふと笑っている筈なのに笑ってい
ない人が一人。

まだまだ終わりは先のような。

帰ってスカさん達と連絡でも取るか。ルーとかの癒し成分が欲し
くてたまらん。後、ゼストさんとかに愚痴ろう。

一人帰る俺の背中では、どこか物寂しい影が映ってたそう。

7・説明（後書き）

作者「本当にどうするかね？」

ヘル「何がだ？」

作者「ヒロイン。有体に言えばお前の彼女、または奥さんでも捉えてもいい」

ヘル「か、かの……っ!？」

作者「そう驚きなさんな。別にお前の年齢だと普通だろ？ てか普通なら>ピー<卒業しててもおかしくない年齢なんだけど」

ヘル「作者あッ!」

作者「え、ちよっ!？ 何でそんなキレてんの!？ てかミーティアを持つんじゃない？ それはまだ出てきてないだろうがッ！ 持つならジーニアス ハッ!」

ヘル「言質は取ったぜ？ ジーニアスならいいんだな？」

作者「待て、待つんだ。話をしよう……、あれは確か」

ヘル「んなネタを繰り出しても遅いッ!」

作者「俺の何が悪かったというんだ!？ あれか、彼女とか奥さんとかか？ まさか>ピー<卒業発言がいけなかったのか!？ あれはほんっ……」

ヘル「砕け散れッ！
“ラゲナ・ブレイド神滅斬”！」

作者「それ、ちが
」

ヘル「悪は滅んだ……」

EX - 1・PV数10万ヒット記念、主人公設定公開（前書き）

少しずつ感想を貰え、感謝感激、狂乱狂喜している作者です。

今回は題名でわかる通り、PV数10万ヒットとユニーク数1万ヒット記念です。

ネタばれになりそうな要素は極力省いているのであまり問題はないかと。

EX - 1・PV数10万ヒット記念、主人公設定公開

作者「PV数10万ヒットとユニーク数1万ヒットを記念して、今日は我が主人公、ヘルメス・アスルマグナの設定を少し公開しようかと思う」

ヘル「いきなりだな？」

作者「気にするな。でも全然物語が進行してないから、それほどのモノを載せることも出来ないけどな！」

ヘル「意味なくね？」

作者「黙れっ！やることに意味を見出すのだよつ。これだから若造は……」

ヘル「……一応俺の設定だとお前より年上になるんだけどな、俺」

作者「黙れっ！このピーがッ！」

ヘル「テメエッ！」

名前：ヘルメス・アスルマグナ

年齢：25歳

身長：176cm

体重：68kg

役職：本局技術局副局長

ヘル「えらく普通だな……」

作者「まあ軽くジャブからだろう?」

性格：面倒臭がり。自分以外に出来る人物がいるなら大抵その人物に任せ、自分は趣味である開発、発明に勤しむ。

だが、結局は”甘ちゃん”なので手助けしてしまう。
芯が通った人間を好み、善人だろつが悪人だろつが仲良くなる。

ヘルメスの場合、善人だろつと気に入らなければ徹底的に無視する、または嫌がらせ。

作者「うん、軽い外道だな」

ヘル「待て待て待て！ どこに外道要素がつ!？」

作者「最後の行はどう見ても外道だろつ?」

ヘル「そこまでやったことはねえよ。やってもちよつと蓋を開ければ一日くらい気絶する衝撃を放つ吃驚箱くらいだ!」

作者「十分外道だろつが……」

資格：S級デバイスマイスター

メカニックマイスター

乗り物関連全般

他多数

作者「やっぱり技術関連ではチートだな」

ヘル「乗り物関連つてのは何だ？」

作者「そりゃ自動車、バイクと来てヘリに戦車、果てには次元航空艦隊と何でも出来るぞ？」

ヘル「無駄に有能だな……」

作者「それがお前の持ち味だろう？」

容姿：中肉中背。常に白衣みたいな物を纏っている為、予想外に鍛えられている身体には目がいかない。

髪の毛は黒色で、散髪に行くのが面倒なので垂れ流し。なのであまり顔などは注目しないが、予想以上に美形。

作者「イケメンは氏ねっ！」

ヘル「俺のせいだよっ!？」

魔導師ランク：Aランク

魔力資質：Fランク

魔力技術：魔法制御能力 - SSSランク

魔力運用能力 - SSSランク

ヘル「何て言うか歪すぎだろ？」

作者「だな。ちなみになのはの魔力収縮能力も同じくSSSランクにこの小説では設定してるぞ」

ヘル「ちなみに能力の表し方はどんな感じだ？」

作者「こんな感じだ」

SSS - 化物クラス。正直な話、人間とは到底思えない

SS - 化物に一步届かない。だが常人からすればどっこいどっこい。

S - エースやストライカーと呼ばれる人間クラス。その中でも最上位に位置する。

AAA - 一般的なエースやストライカー。

AA - 一般の魔導師が滅茶苦茶得意と言えるレベル。

A - 一般の魔導師が得意と言えるレベル。

B - 普通。

C - 少し苦手。

D - 苦手

F - 滅茶苦茶苦手。

G - もう無理。てか使えねえよ。

ヘル「……………」

作者「良かったな。化物クラスで？」

ヘル「何て言うか、な。てかやっぱりなのはも化物クラスなんだな」

作者「そりゃなあ。あの砲撃はエグいだろう？」

ヘル「まあな。初めてアイツの”全力全壊”を見た時は笑ったな。俺が作ったデバイスを持たしたら手を付けられなさそうだと本気で思ったし」

作者「なのは魔改造計画か？一応ゆつくりと進行中だがな」

ヘル「マジかよっ!？」

作者「次はお前と隊長陣の能力の指標でも作ってみるか……」

「”歩くロストログア製作機” ヘルメス・アルスマグナ」

魔法制御能力：SSS

魔法運用能力：SSS

魔力収縮能力：？

魔力圧縮能力：？

魔力変換効率：？

瞬間最大火力：？

「”管理局の白い悪魔” 高町なのは」

魔法制御能力：S

魔法運用能力：AAA

魔力収縮能力：SSS

魔力圧縮能力：AAA

魔力変換効率：S
瞬間最大火力：SSS

〽 金色の死神” フェイト・T・テストロッサ〽

魔法制御能力：AAA
魔法運用能力：S
魔力収縮能力：S
魔力圧縮能力：SS
魔力変換効率：S
瞬間最大火力：SS

〽 最後の夜天の主” 八神はやて〽

魔法制御能力：AA
魔法運用能力：AAA
魔力収縮能力：S
魔力圧縮能力：SS
魔力変換効率：SS
瞬間最大火力：SS

〽 烈火の将” シグナム・八神〽

魔法制御能力：AA
魔法運用能力：AAA
魔力収縮能力：AA
魔力圧縮能力：A
魔力変換効率：S
瞬間最大火力：S

「鉄槌の騎士」 ヴィータ・八神

魔法制御能力：A A

魔法運用能力：A A A

魔力収縮能力：A

魔力圧縮能力：A

魔力変換効率：S

瞬間最大火力：S S

作者「こう見ると、本当に隊長陣は化け物揃いだな……、少し強すぎたか？」

ヘル「俺の？つてのは？」

作者「まだ作中では出てないからな。そのうち第二弾とかで出す予定」

ヘル「またコレをやるのか？」

作者「ま、気分しただがな？ 次はお前の発明品を行くぞ」

「発明品」

・次元チャック（またの名を四次元 ケット）

ヘルメスが某管理外世界に赴き、その時に視聴した国際的アニメを元に製作。

使用方法は至って単純であり、宙にそのチャックを放り投げると宙に固定され、それを開けば次元が開く仕組み。ヘルメスがその中に入っているのはほとんどが自分の発明品。

たまに意味がわからない物や、自分で入れた記憶がない物まで入っていることがある。

・瞬間転移装置（またの名をどこで　ドア）
次元チャックと同様、同じ国際的アニメを視聴し開発を結構。
世界に漂う魔力を吸収し、それを元に次元跳躍魔法を発動させるため、魔力がない人間でも簡単に次元跳躍が出来るという優れた一品。

・インテリジェントデバイス”ジーニアス”
”天才”の名を冠するヘルメスの相棒。

そのスペックは笑えるほど廃スペックであり、常時世界の魔力を取り込む機構を有している。また、魔力演算や情報解析などケタ外れな高速演算を可能な一品。

AIは女性型を使用し、ヘルメスのことをマスターと呼ぶ。
待機形態はカード。通常状態では杖、また変換機構を有しており、現在では薙刀の姿も取っていた。

ちなみにバリアジャケットは某弓兵の服装を全体的に黒の変えたもの。普段が白色なのでギャップあり。でもそれがいい！

・強化外骨格
バードスーツ

陸で採用された一品。

性能は世界の魔力を吸収し、それを筋力や反射神経などに変換する。これにより魔力がないものでもランクにしてAA相当の実績を出すことに成功。

過度な吸収は危険とし、ヘルメスはAAA以上の魔力付加が掛ければ機能を一時的に停止させる安全弁を採用。

この発明のおかげで陸の慢性的な人員不足に嘆くことは少なくなった。しかし、それと同時に本局などは不満を持つ。

・XV級大型次元航行船”カタストロフ”

ヘルメスが歳の離れた友に送った一品。

送られた相手は次元航空艦隊総提督、つまり海のトップ。

アルカンシエルは勿論のこと、常に全方位にAMFの障壁を展開しており、またこの艦だけ質量兵器がこれでもかというほど搭載されている。

実際、それを知っている人間は一部で、ほとんどの人間が高性能な次元航空船としか認識していない。

・超大型情報端末機”ミームル”

本局の局長、つまりは管理局の表のトップに泣きつかれて開発した一品。

その目的は管理局の全情報の収集、解析、整理の三点。他にも色々機能はあるのだが、一般的なものはこの三つ。

ヘルメスが持てる限りの知識をフル活用した結果がこれで、現在は魔窟まで称された無限書庫の人間に物凄く重宝されている。

防御面も完璧で、ヘルメス以外ではこのセキュリティを抜くことはほぼ不可能。ヘルメスだけが全情報へのアクセス権限を有している。

・戦術級兵器”ジークフリード”

暇つぶしで作り上げた兵器。

管理局では準ロストロギアとまで言われるほど強力で、現在は厳重な封印が施されている。

詳細は単純な話、小型のアルカンシエル。

次元航空船にしか取り付けることが出来なかったそれを、大体部屋一つ分の大きさまで縮小された。

作者「技術面は本当に笑えるくらいチートだな（笑）」

ヘル「趣味なんだがなあ……」

作者「でも趣味だけで生きていけるって相当だよな。俺もそうやって生きていきたい」

ヘル「お前じゃ無理だ」

作者「俺もわかってるよ……。はあ、次はお前の交友関係ね」

時空管理局本局局长：一応の上司。ほとんどが親戚のおっさんみたいなポジション。

本局技術局局长：作中にはまだ出てきていないが、これも上司。趣味仲間みたいなもの。

三提督：コチラから見れば厄介事を持つてくる老人。でも感謝はしている。アチラからすれば手の掛かる孫。でも本当に可愛がっている。

次元航空艦隊総提督：飲み仲間。プレゼントに次元航空船を渡す。

教導隊総隊長：バトルジャンキー1

武装隊総隊長：バトルジャンキー2

レジオン中将：無駄に強面のオッサン。陸に賭ける情熱は人一倍で、中々好感の持てる人物。この人物の頼みで強化外骨格パワードスーツの開発プロジェクトが発足。

作者「本局、陸、海、空のトップが揃い踏みだな」

ヘル「まあ全員をそれなりに俺は認めてるからな」

作者「お次は裏関係だ」

ジェイル・スカリエッティ：表向きには広域指名手配されている次元犯罪者だがその真相は？ ヘルメスとは面識があり、また仲も良さげ。

クイント・ナカジマ：公式的には死亡とされているが、ヘルメスの口ぶりからすれば生きている？

ゼスト・グランガイツ：上に同じく。

ルーテシア・アルピーノ：上の二人と同じく公式では死亡と発表されたメガーヌ・アルピーノの娘。スカリエッティやヘルメスの話ぶりからすると、面識あり？

ナンバーズ：同上。

最高評議会：ヘルメスが毛嫌いする老害共。

コピー：？

作者「さて、ここらへんはそのうちハッキリしてくる項目だな」

ヘル「でもいつになったらわかるんだ？ 実際、やっとな原作の4話だろ？」

作者「う、五月蠅いなっ。もうすぐだよ、もうすぐ！」

ヘル「お前の言うことは信用出来ねえよ」

作者「酷いな……。ま、それは置いておいて、このくらいでいいか」

ヘル「それはお前が決めることだろ？」

作者「まあそんなんだが、如何せん物語の進行上、あまり書けないんだよな」

ヘル「なら何で書いたんだよ……」

作者「だって他者様を覗いてみたら、大半は最初辺りで主人公の設定を公開してるから……」

ヘル「あゝ、まあなあ」

作者「だから俺も乗っかっておいた方がいいかな、と思って」

ヘル「俺達は俺達、他は他でいいんじゃないの？」

作者「俺は小心者なのっ！」

ヘル「はあ……。ま、今回のところはこれで終わりだ。次回も楽しみにしておいてくれ」

作者「ちよっ、それは俺の言葉だろっ!？」

EX - 1・PV数10万ヒット記念、主人公設定公開（後書き）

作者「現在の嫁候補はなのは、フェイト、ギンガ、カリムが一票ずつだ」

ヘル「……………」

作者「どうした？ 読者の皆さんの要望が気に入らないのか？ 折角感想に書いてくれたというのに」

ヘル「はぁ……………」

作者「ふむ？ まあいいか。これからもドシドシ応募してるので、皆さん奮ってご協力お願いします」

ヘル「何か日本語おかしくね？」

作者「そう？」

8 ・ファースト・アラート（前書き）

作者「最近なんか物凄く眠い……」

ヘル「早く寝てないからだろ？」

作者「一応12時間は寝てるんだけど……」

ヘル「それはただの寝すぎだ、馬鹿」

8・ファースト・アラート

「元氣があり余ってるねえ……」

隊舎の窓から見える風景。

海上シュミレーターで激しく訓練を行っているフォワードメンバーとなのはの姿を見つけ、そう呟いた。

現在、俺はコーヒーを片手に空間モニターをカタカタを弄っている。

ふむ、レジアスさんからのメールか。

なになに、「どうやら緩衝材目的で新設部隊に組み込まれたそうだな。それについては御愁傷様と言う他ない。しかもメンバーの殆どが若手でなおかつ潔癖症の海のメンバーか。正直な話、この部隊に関しては全く興味を持っていなかったがお前が行くということで一応の連絡は回しておこう。ああ、今度休みが出来たらまた飲みに行こうか。オーリスも久しぶりに会いたいと言っていたしな。では」
簡略に説明すればこんなもんか。

にしても飲みに行こうとか、疲れでも溜まってんのかね？

人員不足は解消したけど、陸の問題なんて山ほどあるからなあ。

「まあ時間が出来たら行くつと……」

さて、メールの確認も済んだことだし、飯でも食いにいくか。

ほう？

突如隊舎の中にアラートが鳴り響く。

「一級警戒態勢か……」

全く、面倒事になりそうだ。

俺は一応の為、今この隊舎に残っている隊長陣、つまりなのはの下に向かう。

確か今はデバイスルームに居た筈だな？ 何か新デバイスの実装とか言ってたし。

『確認完了。確かにデバイスルームになのはさんとフォワード四名、それにフィニーノ技師とリイン空曹長がいます』

「助かる」

すぐにデバイスルームに向かい中へと入る。

「ヘルメスさんっ！」

「何でも面倒事が続くかねえ……」

俺が中に入ると同時にロウラン准尉とはやてからの通信。

「なのは隊長、フェイト隊長、ヘルメスさん、グリフィス君。こちらはやて」

おいおい、華麗に俺もメンバー入りですか、そうですか。

俺って前線メンバーじゃない筈なんだけどなあ。最近ホントに厄日だよな。この間の模擬戦もそうだし。今日は出勤要請ですか。

「状況は？」

「教会騎士団の調査部が追っていたレリックらしきものが見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアールで移動

中

「内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる」
「おいおい……」

中々有能じゃねえか。腐っても”コピー”ということか？

「いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか？」

「私はいつでも」

「私も」

あれ？ 俺の名前が呼ばれなかった？
てことは今回は行かなくて良いの？ やった！

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。皆もOKか？」

「……はいっ！」「……」

よしよし、ならば俺は関係ないということで部屋に戻らせて貰うかね。

「んで、部屋から出て行こうとしとるヘルメスさんも行って貰うで？」

「……え？」

ピクツと身体が止まる。

何て？ 幻聴？ 何か言って貰う的な言動が聞こえたんだけど。

「当たり前やろ？ なのはちゃんとフェイトちゃんだけやったらフオワードメンバー全員をアシストし切れる筈ないんやから」

「マジで？ 俺って別に前線メンバーにも登録されてなかった筈な

んだけど。ここじゃ技術職やってたらいっておっさんには言われたし」

「ん？ 何かミゼットさんが扱き使ってくれて言っとったけど」
「婆さん、そりゃねえよ……」

婆さんが言っただのなら仕方ないじゃねえか……

「はあ……、仕方ねえなあ。こういうのはこれっきりにしてくれよ？ 俺はひ弱な人間なんだから」
「シグナムに勝つ人間がひ弱な訳ないやろ」

「新デバイスがぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい……」
「頑張りますっ」

うっん、揺れる揺れる。

「おい、ヴァイス。もうちょい緩やかに運転出来ねえの？」
「そんなこと言っただって旦那、今は緊急事態何すよ？」
「おま、これで現場に着く前に酔ったらどうすんだよ」
『そんな殊勝な人間じゃないでしよ、マスターは』

まあ慣れてるけどさ。ほら、新人達とか絶対慣れてないからこうしてアドバースをね？
流れて行く景色を見れば、それだけこのへりが高速で飛翔していることが窺える。

目的地は山岳リニアレール。六課の隊舎からならば、この速度を

維持すればさほど時間は掛からない距離だ。

「にしても初出勤が実戦とは、いやはや。運がいいのか悪いのか」
「どっちかって言うと、悪いでしょうねえ」

まあちとハードなのは厭わないな。

そっぴや俺の初実戦ってどんなんだったっけ？ 現場に出る前だったら、あれだ。爺さん相手に本気で死合^{マシ}ってた奴かな？

現場だと、管理外世界の犯罪者共の駆逐だったような気もするけど。

『マスターの方がよっぽど過酷な道を歩いてきてますよね』
「生まれが生まれだしな」

にしても、やっぱりフォワード勢は緊張でガツチガチだな。
まだスバティアはマシだけど、最年少の二人が特に酷い。エリオは動けるかもしれんが、キャラがなあ。

「危ない時は私やフェイト隊長、リインとそれにヘルメスさんがちゃんとフォローするから」

「だってさ」

「旦那も頑張ってくださいよ？」

「そんなキャラじゃないんだけどなあ……」

まあちゃんとフォローくらいはするけどさ。

せっかくの原石をみすみす潰させるわけにはいかないし、それに相手があの糞野郎の玩具だから。

「まああれだ。無理と思ったら深追いなんてしなくていい。撃ち漏らしも気にするな。大事なのは絶対に帰ってくることだ。お前らの

ミスは俺達で全部カバーしてやるくらいの度量は持つてるからな」
「ヘルメスさんの言う通りだよ。皆、わかった？」
「……はいつ！」「……」

返事はいいねえ、返事は。

「やっぱり不安か、キャロ？」
「えっ、あのその……、はい」

一人だけ顔を俯いて手を握り締めるキャロに話しかける。

「タクツ……」
「わわっ！？」

わしゃわしゃと少し乱暴めに頭を撫でる。
だから俺は言っただろ？ お前くらいの年代はルーに似てるからって。そんな顔すんなよ。

「大方自分の力が不安なんだろ？ 誰かを傷つけるかもしれないって。でもな、所詮そんなものだ。俺が持つ力も、なのはが持つ力も、フェイトが持つ力も、フォワードメンバーが持つ力も、本質は傷つけるものだ」

「でもっ！」

「だが、力も結局は使い様だろ？ 包丁や車と一緒になんだよ。使い方方を誤れば、それだけで人を殺す凶器となるが、使い方を誤らなければそれは生活を豊かにする物質になるだろ？ 魔法も所詮道具にしか過ぎないんだよ」

そついうことだ。

いくらクリーンな力として管理局は魔法を他次元に売りこんでい

るが、魔法も結局は人を殺める力の一旦にしか過ぎない。

大体、クリーンな力とか非殺傷設定とか言ってるが、実際に年に結構な数の人間が死んでいる。勿論、非殺傷設定の魔法によって。

「心を強く持て。力を制御しなければそれはただの災害にしか過ぎない。だから制御しろ、自分が全てを操れるように、その人を殺める力で誰かを守れるように」

俺の言葉を周りは静かに聞いている。

それと同時に空からのガジェットの軍隊。

「わかったな、キャロ。要は使い方だ。それだけを間違わなかったら大丈夫だ。それにお前にはもう居場所が出来ただろ？　ここにいる人間はお前を怖がりしない。もしそんな奴がいたら俺のところに連れて来い。思いつきりボコボコにしてやるから、な？」

「は、はいっ！」

「良い返事だ」

さて、俺はどうしようかね。

フォワードメンバーについていてもいいけど、生憎とチマチマやるのは好きじゃない。

だからと言って空中戦をするのは面倒だな。

「んじゃヴァイス、ハッチを開けてくれるか？」

「え？　何するんすか？」

「ん〜？」

俺は次元チャックを開き、いつもは見に付けないアクセサリーを取り出す。

「こつから空の支援でもしようかと。なのは、もう行ってもいいぞ？ 危険になったら俺が全部叩き落としてやるから」
「了解！」

その言葉を聞くや否や、なのはは身を空に放りだした。

「さて、起きろ “リーガル”」

『久しいですね、御主人』

「あの、そのデバイスは？」

俺の新たなデバイスを見つめ、ティアナはそう質問した。

「これか？ これはそうだな、補助デバイスか。分類的には」

『そうですね。私は基本、索敵などを行いますし』

「ということだ。リーガル、ジーニアス、セットアップ」

『セットアップ 完了。バリアジャケット 展開』

『同じく完了』

模擬戦の時と同様なバリアジャケットに身を包む。

あの時と違うところは、宙に浮かぶクリスタル一点のみ。

「さあ、撃ち落とそうか」

8 ・ファースト・アラート（後書き）

作者「やっと本編も進み始めたな」

ヘル「言っても原作の1／6くらいだろ？」

作者「それを言ったら駄目だ。しかもオリ展開が入る予定だから、実質的に1／10くらいなんだよな（笑）」

ヘル「……………」

作者「しかもお前の恋愛（笑）も入れるからそれ以上の分量かな（笑）」

ヘル「恋愛（笑）って……………」

9・玩具(ゴミ)の掃除(前書き)

作者「……本当に申し訳ない」

ヘル「どうしてこうなったんだ？」

作者「リアルが忙しかったんです」

ヘル「それでこう長引いたと？」

作者「はい。ちなみに次は来週の木曜が過ぎるまで更新が停止という……」

ヘル「……ごめんなさいは？」

作者「本当にごめんさない」

9・玩具（ゴミ）の掃除

「玩具がゴミのようだ……」

『そのままじゃないですか』

「んなことは気にしなくていい。リーガル、空の状況は？」

『ここより北東部から？型が六機、？型十機ほど進行中。その間に高町空尉とテストロッサ執務官が防衛のスタンバイという立ち位置です』

「OK。こちらヘルメス、二人とも聞こえるか？」

念話を使用し二人と会話を測る。

別段通信機器による会話でも問題はあまりないのだが、それだと”コピー”に盗聴、またはハッキングを食らう可能性も捨てきれない。

フォワード勢が初出動という点を顧みれば無駄なアクシデントは起こさせない方が吉だろう。

>こちらスターズ01。聞こえるけど、どうかしたの？<

>作戦だよ、作戦。現在こちらで確認したところ、北西部から玩具共は進行中だ。だからなのは右翼、フェイトは左翼から共に挟撃を行ってくれ。正面の撃ち漏らしは俺が処理するから<

>こちらライトニング01。でもそれで大丈夫？ ガジェットつて結構知能があると思うんだけど……<

フェイトが心配するような声を漏らす。

>んあ？ あいつらに知能なんてものは欠片もねえよ。特に眼の前に自分達が求めている物があるときはなく

>そうなの？<

> ああ。それに俺を誰だと思ってるんだ？ これでも技術局の副局長だぞ？ あんな玩具の行動パターンなど全て解析終了してる<

まあ今回出てきた新型についてはまだだけどな。

> それならすぐに配置に着くね<

> ああ。挟撃のタイミングは今から120秒後。見誤るなよ？<

>> 了解！<<

さて、今のうちにこいつらも車両の方に降ろしておくか。

「それじゃお前ら、そろそろ下に行つて目的の物を保護してこい。ライン、そつちは任せるからな」

「了解なのですよ」

それからラインが少し声を掛け、メンバー全員は降下していく。キャロもさっきの俺の言葉が効いたのか、幾分か緊張は解れたようなので何より。ただ、一つ疑問に思ったことは、何故全員がバリアジャケットを展開する前に降下したんだ？ 超長距離からの砲撃を食らえば即アウトなんだが……

なのは真似……なんだろうなあ。後でなのはに注意しておくか。

『マスター、挟撃まで後10秒を切りました』

「なら俺らも準備するか」

準備と言っても、ただハッチの前に立つただけなんだけどな。

既にリーガルが進行中の玩具全てを補足してるから慌てるようなこともなく、手には相棒のジーニアス。負ける確率など億一つもない。

『挟撃まで残り5、4、3、2、1 』

ジーニアスが秒読みをした終わりに、左右から桃色と金色の砲撃が玩具共を両翼から飲み込んだ。

流石は”エースオブエース”と”雷光”だな。撃ち漏らしは……？機が三体か。

「ジーニアス、ヴァリアブルバレット、数は3で問題ないだろ」
『了解しました』

瞬時に構成される魔力弾を、俺はリーガルの補助を伴い発射する。空を掻っ切るかのような速度で飛翔するそれらは、空に浮かぶ玩具を補足した瞬間に撃ち貫いた。

『撃墜確認。ですが御主人、追加として？機が十二機、？機が二十機が新たにやって来ます。到着予測は、現在隊長達が待機する空域に450秒、列車には670秒ほどです』

「ならさつきと同じ戦術で問題ないか」

今確認した情報をなのは達に伝え、同じように撃墜する準備をする。が、ここでアクシデントが起こったようだ。

列車から放りだされるエリオと、それに伴って身を崖から投げたキャロが俺の眼に映る。

「っておいっ！」

外はごちゃごちゃ言ってるが、そういう問題じゃねえだろ？フルパフォーマンスとかどうだっていいんだよ。怪我がなけりやな……

「叩き潰す……ッ！　一機残らず粉碎してやるよッ！」

崖から復帰したエリオとキャロを眼に収め、俺は宣言した。

『挟撃まで3、2、1　撃ち漏らしは十三機です』

>ごめんヘルメス！　少し撃ち漏らしちゃったッ！<

>気にするな　<

残りは塵一つ残さず叩き潰すからな。

「ジーニアス、ブラストクレイモアをチャージ」

『ブラストクレイモアをチャージ　完了。いつでも発射可能です』

「3カウント後、発射」

『了解。スリー、ツー、ワン　発射』

杖の先端から発射される極太の砲撃魔法は、玩具共を飲み込む寸前に変化を起こす。

クレイモアとはある管理外世界で設計された指向性対人地雷の名称で、それは箱の形状を取り、地上に設置。それが起爆すると爆発により中に封入されていた鉄球が扇状に飛び出し、敵を殲滅するという設計になっている。

それを俺は魔法に組み込み、まず箱の代わりとなる砲撃に見せかけた膜を構築し、その膜の中に鉄球の役割を成す多重弾殻弾を多数覆う。多重弾殻弾の大きさは大体人の拳大より小さいくらいで、量は詰めれるだけ詰め込んでいる。それは俺の指示一つで膜を剥がすことが出来、敵の眼の前で砲撃から散弾に変えられるという特性を持つ。瞬間的に広がりを見せるそれを初見で見破ることは難しく、また多重弾殻弾という特性上、AMF持ちの玩具だろうと容易く撃ち貫くことが可能なのだ。

『全機撃墜を確認』

「追加機体は？」

『北西、北東共に進行中。数は両者を合わせれば五十機を超えます』

進路は二つとなると、挟撃は難しいか。

>俺が北東を抑えるから二人で北西を頼めるか？<

>それは大丈夫だけど……、一人で大丈夫なの？<

>俺は問題ない。一応フォワードの方も気に掛けておくからそっちも頼む<

>了解<

なら、さっさと制圧するかね。

「ヴァイス、俺も少し出てくる」

「了解ですぜ、旦那」

「ヘリは任せるからな？」

「当然！」

そう言い残し、俺は宙に身を投げる。

ある一定の高度まで下りると、そこから飛行魔法を扱い、俺が担当する北東部に進行。相手の進路上に立ち、一機足りとも後ろには行かせはしない。

魔力に関しては考えるまでもない。技術？ そんなものは在り余ってるさ。

「アクセルシューター、数を300。サークルフェスティバルを發動」

『アクセルシューター準備完了。順次配置に設置します。また、幻影魔法により視認、センサー類での確認を無効化します』

俺が一つの結界として使えるのは球形にして全長500メートルほど。

それらの中に入り込んだ瞬間に、先ほど生成したシューターで根絶やしにするという寸法だ。

『先頭が範囲に侵入。時間にして13秒後に最後尾が範囲に侵入します。26秒後が一番効果的な範囲に変化しますね』

「なら26秒後にシューターを全て発射。300を三つに分け、それぞれが操れ。勿論思考共有も欠かさずな」

『了解です、マスター』

『了解だ、御主人』

26のカウントの後に、先ほど幻影処理を施したシューターを待機させていた場所から発射。

上下左右360度から来る全方位攻撃が玩具を一機足りとも残さず殲滅していく。正直、300もいらなかったな。

使わなかったシューターは魔力を解き、全てを魔力素にして世界に還元する。

>こちらヘルメス。こっちは撃墜したがそっちはどうだ？<

>こちらスターズ01。こっちはもう少しってところかな。でも遠目から見てもまた追加が来てるね<

>……こっちも来たな。んじゃこのまま殲滅戦を維持だ<

そのまま念話を打ち切り、空を我が物顔で進軍してくる玩具共を殲滅していく。

しばらくするとリーガルの索敵範囲からは玩具の反応が消え失せ、またロングアーチからも同じ報告がなされる。

どうやらロングアーチからの話を聞くと、無事にフォワードメン

バーがレリックを保護した模様。皆軽傷ほどで留まり、命の危険があるような重傷は負っていないようだ。

「それじゃ帰還するか」

一応リーガルに辺りを索敵してもらいながら、ヘリの場所まで戻っていく。

事後処理まで俺は出なくていいだろ。そこらへんは経験させないと。フォローはなのはとフェイトに任せますう。

「ただいまっ」と

「御苦労でしたね、旦那。にしても強いっすねえ、よくあれだけの数の魔力弾を制御出来ますね？」

「まあこいつらにアシストしてもらってるけどな」

ヘリの座席に座り、俺は眼を閉じる。

「隊舎に着いたら呼んでくれ。少し仮眠を取るわ」

「あれ？ 寝てないんすか？」

「ちよつと用事があつてな」

眼を閉じるとすぐに眠気はやってくる。

昨日は夜遅くまでスカさん達に通信を掛けてたからねえ。通信を切ったのも朝日が出た辺りだったし。

ま、何か問題が発生すればジーニアスが起こしてくれるだろ。んじゃおやすみ。

9・玩具（ゴミ）の掃除（後書き）

作者「はぁ……、最近忙しすぎる」

ヘル「まあ更新頻度を見れば明らかだもんな」

作者「一応作者は学生なんだが、クラス、特に横の生徒が授業中五月蠅すぎてストレスが物凄く溜まる溜まるw」

ヘル「……お前は真面目な生徒なのか？」

作者「授業妨害なんかはしないぞ？ 授業中に本読んだり他の勉強したりするだけであって」

ヘル「あんまり他人のことを言えなくね？」

作者「でもこれは自分の責任であって他人は迷惑掛けないじゃん？ まだマシだろ？」

ヘル「まあ……なあ……」

作者「そんな愚痴はいいとして、本気で忙しいんだよ。小説に回す時間がないほど忙しいんだよ。でもよくよく考えたら来月に狩猟ゲームの最新作が出るからまた時間が足りないんだよ」

ヘル「忙しいのは仕方ないとして、狩猟ゲームを諦めろよ……」

10・キーワード（前書き）

作者「宣言通り、何とか間に合ったか」

ヘル「もう少し余裕持って行動したらどうなんだ？」

作者「余裕が作れるのならそうするぞ」

10・キーワード

「休暇？」 何でこないな時期に取るんや？」

課長のデスクに座るのは、この機動六課課長である八神はやてであり、今現在、俺はその人物の前に突っ立っている。

理由は単純で休暇願いの許可を貰いに来たのだ。

「知人からの連絡＋足りない私物の追加をせにやなんのだよ」

割合で言えば99：1くらいだけどな。別段私物は無くても困らないってレベルであって、必需品とまではいかない。

だが、知人に会いに行くというよりはよっぽど現実味があり、また必要度は高く感じられる。ま、ここところは話術の駆け引きだな。

「ん、この間の出勤過ぎてからは奴さんも静かやからなあ……、ん、許可するわ。一泊二日分でええか？」

「出来ればもう少し欲しいとこだが無理は出来ないか。OK、それで申請しておいてくれ」

「了解や」

許可を貰えばコチラのものだ。

すぐさま課長室から逃げるように退出した俺は自分の砦へ直行。身嗜みを整え、持ち物は……特にねえな。外に出たら何か買っているか。

粗方準備を終え、俺は瞬間転移装置（またの名をどこで ドア）を取りだし、その中に入って行った。

side フェイト

「ジェイル・スカリエッティ……」

空間ディスプレイに映る金板に書かれていた文字は、私が追い求める次元犯罪者の名前。

その名前に聞き覚えがなかったであろうシャーリーの為に、彼が起こした事件の内容を展開させる。

出てきたそれは、ワンスクロールでは到底下に辿り着くことは出来ないほどの量があり、それほどの事件を引き起こしてきたを示す。

「ロストログア事件を関連として、数え切れないほどの罪状で、超広域指名手配されてる一級搜索指定の次元犯罪者だよ」

「次元犯罪者？」

罪状の展開が終われば、それと同時に表示される容姿。見た目は気の良さそうな科学者。だが、実体は真反対。

「ちょっと事情があつてね。この男のことは何年か前からずっと追ってるんだ」

「そんな犯罪者が何故態々こんなわかりやすく自分の手掛かりを……」

「本人だとしたら挑発。他人だとしたらミスリード狙い。どっちにしても、私やなのはがこの事件に関わってるって知ってるんだ……」

ギュッと手を握り締める。

胸の内に宿るものは、ドロドロとした黒いモノ。

世間一般の表現で言い表すのなら、それは“憎悪”と称されるほ

どの黒い感情。

「だけど、本当にスカリエッティだとしたらロストログア技術を使ってガジェットを製作出来るのも納得出来るし、レリックを集めている理由も想像が付く」

「理由？」

「シャーリー、このデータを纏めて急いで隊舎に戻ろう。隊長達を集めて、急いで緊急会議をしたいんだ」

「はい、今すぐに」

次々とバックアップが取られていく最中、私は心の中で誓った。

お前は絶対に私が捕まえてやる……ッ！

side out

薄暗い道を歩いていく。

光は仄かな蛍光灯のみで、少し注意しなければ足元すら躓いてしまふほどの薄暗い中を俺は歩いていく。

手に持つは大量のお菓子。背負うはジュース。結論 物凄く重い。

「声紋認証開始」

ようやく終わりが見え、扉に声を掛けた。

そこは声紋認証によりロックが掛かっており、一部の人間しか立ちいることは不可能。

勿論、俺はその一部の人間に属している。

『どうぞ』

「ヘルメス・アルスマグナ」

『認証中 確認完了。ヘルメス・アルスマグナ本人と確認。扉を開きます』

ガシャン、と扉が開けば、今まで通つて来た薄暗い道が嘘のように光に溢れる。

一歩踏み出せば、毎度のように迎えに着てくる影が一つ。

「お帰り、お兄ちゃん」

「ただいまだな、ルー」

その小さな影は艶やかな紫苑の色を持つ少女であり、俺の妹分であるルーテシアだった。

ルーはトコトコと俺に近寄り、そのまま俺を抱きしめる。が、傍から見れば引っ付いているようにしか見えない。

だが、それも良しだ。今まで苦勞が重なっていた俺の荒んだ俺の心が癒される。流石は俺の癒し成分一号だ。

「他の皆は？」

「いつも通りかな。あ、でもクイントさんが駄々捏ねてるのをゼストとドクターが必死になって止めてたから、早めに行つてあげた方がいいかも」

「あの人は……」

顔に手を当て溜息を吐く。

駄々捏ねるってどこの子供だよ……

「しょうがないんじゃない？ 自分の大切な人とずっと逢えないのは辛いだろうし、私も同じ目にあつたらそうなると思う」

「はあ……」

苦笑を零し、俺は歩みを再開させる。

それと同じようにルーも歩き始める。が、歩き始める前にルーの足元に魔法陣が光り輝く。それはキヤロが扱う召喚と同系の魔法。

そして魔法陣から現れる一匹の召喚獣。漆黒の甲殻を持ち、昆虫に属しながらも二足歩行で移動をこなすそれは、ルーやメガーヌさんが全幅の信頼を置く一匹。

「ただいま、ガリユー」

「……」

「ん？ 持ち物を持つてくれるのか？ 助かる、サンキュー」

無言ながらも、一切のコミュニケーションが取れない訳ではない。付き合っていればそれなりのコミュニケーションは取れるし、今では殆どガリユーが言いたいことを理解出来るようになった。

「んじゃ行くか」

「うんっ」

その大部屋は混沌カオスに包まれていた。

テーブルを占領する数多のお菓子を我先にと群がり集う少女達。その横で冷やかにその様子を見つめつつも、自分も欲望には抗いきれそうに少女達。そんな様子を温かく見守る男性と女性。

そして一番の問題である俺に駄々を捏ねる人妻。

「だーかーらー！ 今は俺にもどうすることも出来ないって言うてるだろ！？ 後一年ほどで解決するんだから辛抱しろよっ！」

「後一年も待ーてーなーいー！ 早く夫と娘達に会ーいーたーいー！」

「いい加減にしておけ、クイント。そんなに詰め寄ってもヘルメスを困らせるだけだ」

「だけど隊長！ 夫達と別れてから早8年なんですよっ！？ いい加減我慢も限界なんですー」

「そうは言ってもな。というより、もしヘルメスがいなければ一生逢うことは出来なかったんだから大目に見てやれ。それに今も必死になって俺達の為に動いてくれてるんだ。後少しくらい辛抱出来るだろう？」

「うう……、そう言われると反論出来ない」

ナイスです、ゼストさん！ 心の中で拍手喝采を送っておく。

ここに来てから一時間ほど、俺はあのテンションのクイントさんに絡まれ、既に息絶え絶えの状態。

あれ、おかしいな？ 俺ってここに癒されに来たのに、何でここまで疲労してるの？

「お疲れ様だね」

「そう言っんなら少しは助けてくれよ……」

ジュースを差し出してくる我が親友。

その容姿は次元犯罪者であるジェイル・スカリエツィと瓜二つ。それはそうだろう、彼こそが“本物”のジェイル・スカリエツィであり、また俺の親友なのだから。

グラスに注がれた中身を一息で飲み干す。

すぐにルーが注いでくれるが、別にそこまで喉は乾いてないので一旦テーブルの上に置く。

「ここはいつも騒がしいなあ。ま、楽しいからいいけど」

「ふふつ、普段はもう少し落ち着いているだろうけど、今日は君がいつからね。娘達もいつも以上にハシャぐのも無理はないさ」

「そんなもんか？」

「そんなものさ」

ふーん、と言葉を返し、未だお菓子の山に群がる親友の娘たちを見やる。

服装は全員がライダースーツ　という奇妙なものの筈がなく、各々が好きな服を選んで着用している。

「あいつらの調整は？」

「全て無事に終了してるよ。インヒューレントスキルISも起動を確認してるし、固有装備も同じく。でもいきなりどうしたんだい？」

幾人かはコチラの話に耳を傾けているようだが、別段ここにいる連中なら聞かれても問題になるような事柄ではない。

なので普通に話す。それが局で言う“秘匿情報”クラスだとしても。

「“コピー”が動いてるって言っただけだから用心の為に一応つてのが建前」

「本音は？」

「何かキナ臭いんだよな。俺に何の話もなく新しく設立された部隊に無理矢理のような形で配属したことも含めて。爺さん達が言うには、前々から言ったら俺が断るだろうと思ってとか言ってたけど、ありや嘘だろうし」

「ふむ……」

その言葉を聞いて考え込む、ス力さん。

「もしかすると聖王教会が関連してるかもしれないね。君は聖王教会は嫌いだろう？ だから三提督達も意図的に君に話さなかったんじゃないかな？ 君はどんな情報でも調べられるけど、自分で態々聖王教会の情報は調べないだろうし」

「ということは……」

スカさんの言葉によって浮上する一つのキーワード。

「プロフェーティン・シュリフテン 預言者の著書による予言か……」

ここに来て、足りなかった欠片がようやく出揃い始めた。

10・キーワード（後書き）

作者「ああ、何か物凄く頭が痛い……orz」

ヘル「風邪か？」

作者「わかんね。電車でうつされたのかも」

ヘル「大事を取って今日は早く寝ろよ。お前もつすぐテストだろ？」

作者「嫌なことを思い出させるなよ……」（泣）

11・穴倉での日常（前書き）

ヘルメス「何か言うことは？」

作者「頭が……痛いとですorz」

ヘルメス「結局治らなかったのな」

作者「あと、テストが疲れたとです。狩猟ゲーム面白いとです」

ヘルメス「前者はいいとして後者は駄目だろ」

作者「久しぶりに獅子と戦争がしたいとです」

ヘルメス「獅子と戦争？ ああ、某最後の幻想の作品か」

作者「あと、積んでるゲーム群と小説を消化したいとです」

ヘルメス「……全部消化するまでにどれくらいの時間が懸かる？」

作者「……半年くらい」

ヘルメス「さつさと小説を書き進めろッ！」

11・穴倉での日常

スカさんとの重苦しい会話は一時中断される。

理由は甚く簡潔であり、俺が座っている椅子にルーが座って来た為だ。もっと簡略に言えば、ルーが俺の膝の上に乗って来たからだ。それを振り払う理由もないし、俺は普段通り勝手にさせる。

それを眺めるスカさんの温かい眼差しはいつものことであり、また後ろでギヤイギヤイと騒ぐ少女達についても同様。

「どうかしたのか？」

「むう……」

言葉にならない声を発し、俺の胸に頭をグリグリと擦り付ける。

それを苦笑で返しゆつくりと頭を撫でてやる。すると、ルーもそれが気持ちいいのか機嫌のいい声が返ってきた。

「もう……、本当にルーは甘え坊さんね」

それを見るメガーヌさんはそんなことを零す。

「別に俺は構わないけどな。それに俺のささくれ立つ心が癒されるし」

「それほど新部隊は面倒なのかい？」

「何て言うか、人使いが荒過ぎる。何で出頭三日で模擬戦をせにやならんの？俺って技術職であつちに行つた筈なのに、今じゃフォードメンバーの訓練も見てるし、それを超えて緊急出動に駆り出されるし……」

「お疲れ様」

「そう言ってくれるのはルーだけだ……っ！」

ガバツとルーを抱きしめてみる。

「ううゝ……」

恥ずかしながらも抱きしめ返してくれた。

本当に可愛いな、もう！

俺はルーを撫でながらも、また愚痴を零して行く。

「はあ、別にいいけどさ。もっとう、アイツらも俺のことを少しは敬えよ。一応アイツらより年上なんだけどねえ。やっぱり顔か？顔が悪いのか？」

「私はお兄ちゃんの顔は好きだよ？」

「あ、それは素直にありがとうって言うておくけどさ。そういう意味じゃないんだけどな」

「実年齢より若く見えるのを気にしているんだろう？ 僕としてはそれほど気にするような事柄じゃないと思うけどね」

「そうよ。別に気になくてもいいじゃない。可愛いんだし」

そう言われるのが嫌なんだよ、メガー又さん。

男はいつになっても可愛いって言われるのが嫌なんだぜ？

そっぴや、俺をカツコイイて言うてくれた奴って居たっけ？ あれ居なくね？

それから何をしたかと言えば、俺の愚痴のような談笑会。

愚痴を言いつつも、最近あった六課の出来事をクイントさんは勿論のこと、スカさんやルー、それにメガントさんやゼストさんを交えての会話。

引つ切り無しに問いかけるクイントさんの疑問を解消し、ゼストさんの武人としての魂を宥めてと大忙し。あれ、おかしいな。俺の愚痴じゃなかったっけ？

まあそれが終わったのは一時間前という頃か。

んじゃ今は何をしているかだつて？

それは

「 ええい、鬱陶しいなっ！ いい加減背中から離れるっ！ 」

「 またまたそんなこと言つて。本当は嬉しいんじゃないの？ 」

「 そうツスよ。折角こんな美少女が抱きついてるんスから 」

「 後ろで控えてるテメエらっ！ さっさとこいつらを引っぺがせよ 」

スカさんの娘たち、通称ナンバーズに揉みくちやにされている。

娘たちと言ったが、それを実行しているのは青い髪 of 空気が読めない子、セイんと、赤い髪 of 「 ツス 」 という口調が特徴 of ウィンデイの二人だけだが。

他の娘たちは我関せず には些かいかないが、皆が皆微笑んでこちらを見ている。

「 チンクっ！ コイツらはお前の妹だろうがっ！ 早くどうにかしろよっ！ 」

とりあえず一番真面目である銀色の髪を持つチミッコ、チンクに助けを求めている。

「 姉は妹の幸せを第一に考えてるからな 」

「 そんな返答いらねえよっ！ クソツ、トーレ！ 」

初段は不発か。ならば次弾を穿つのみ！

紫色の髪をショートカットにした、この中で一番力があるであろうトーレに声を掛ける。

何気に必死で助けを求めているのにな。皆して俺のことを笑いやがって……

「ん、何だ？」

「役立たねえっ！？ クアットロ！」

言ってから気付いた。

眼鏡を掛けたコイツにはどんなことがあっても頼ってはいけなかったということ。

「どうかしたのかしら？ ああ、私にも抱きついて欲しいと」

「もつと酷いっ！ ならばセツテ！」

声を掛けた方向を見ると、お洒落のつもりかヘッドギアを付けたセツテがいる。いるが……

「……」

「沈黙っ！？ オットー！」

短髪の僕ッ娘に助けを求める。

オットーならばどうにかしてくれるハ

「僕じゃどうすることも出来ないよ」

「唯一まともに返してくれたけどどっちにしる意味がねえ！ デイイチ！」

そう言えばそういう性格だったね！？

これも声を掛けてから気付いた。

ディエチも積極的な娘じゃなかったことを。

「と言っても……」

「お前はもつところ、自分の意見を言えるように成長しろっ！ ノ
ーヴェ！」

紅蓮の髪を揺らす彼女に問いかけるが

「俺に振るんじゃねえ！」

「今までで一番キツイ返し方だな、おい！ 頼みの綱のデイド！」

敢え無く撃沈。

次が最後じゃねえか……

だが、コイツは一番信用出来る。

こんな劣悪な姉共に囲まれながらも物腰柔らかに育ったコイツな
ら ッ！

「姉さま達も寂しかったんですから、このくらいは甘んじて受けて
ください、兄様」

「正論返しはセコいぞ！？」

結局は誰も助けしてくれることなく、俺はセインとウィンディに抱
きつかれて時を過ごした。

まあ、その少し後にルーがやって来て助けてくれたけどな。

11・穴倉での日常（後書き）

作者「にしても三週間ぶりくらいか？　こうやって小説を投稿するのよ」

ヘルメス「コッチはな。もう一つはこの間に投稿してたじゃねえか」

作者「それもそうだな。けど、コッチは三週間ぶりじゃん？」

ヘルメス「それはお前が悪い」

作者「orz」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6024o/>

歩くロストロギア製造機

2010年12月14日17時04分発行